

掛川市宇洞ヶ谷横穴墳

1971

掛川市教育委員会

序 文

掛川市の宇洞ヶ谷に、掛川市がし尿処理場建設の用地を定め、その工事に着手したのは、昭和39年6月のことである。ところが工事中、はからずも1基の横穴墳が発見された。この横穴墳は、その形態と、出土遺物の内容からみて、当地方では稀にみる秀でたものであった。

掛川市教育委員会からその報告を受けた当委員会は、係員を現地に派遣するかたわら、その旨文化庁と連絡をとり、斎藤忠主任調査官（現大正大学教授）、三宅敏之調査官（現東京国立博物館有史室長）を現地にまねいて、その措置方法について市当局と協議したのであるが、現状では、この古墳をそのまま保存することが困難であるとの結論に達し、止むなく記録作成に万全を期する方法をとった。

かくして調査は、掛川市教育委員会を通じて、大谷純仁、平野和男、向坂綱二、山村宏の4氏に依頼して実施した。

調査は、短期間とはいえ、調査員各位の絶大なご努力によって、学術的にも多大の成果を収めることができたので、当委員会では、その遺物を昭和43年3月県指定考古資料に指定するとともに、今回その成果を印刷し、広く関係方面にご報告申し上げる次第である。本書が、学術・教育の資料として活用されれば幸いである。

終りに、この調査に多大の労をわずらわした調査員諸氏、並びに関係各位に対し、厚くお礼を申し上げまする次第である。

昭和46年3月

静岡県教育委員会教育長 諏訪卓三

例 言

1. 本書は、昭和39年6月に発見された掛川市下俣字割ヶ谷横穴墳の緊急発掘調査に関する報告書である。
2. 緊急調査は、掛川市教育委員会主催で、遠江考古学研究会の大谷純仁・大崎成夫・平野和男・向坂剛二・山村宏の諸氏が調査に当たった。
3. 遺物の整理は、掛川市教育委員会で実施し、測図は執筆者が分担した。
4. 本書の執筆分担は次の通りである。

緒言、Ⅱ章2節、Ⅳ章3節……………	大谷純仁
Ⅰ章、Ⅱ章1節、Ⅳ章1・2節………	平野和男
Ⅲ章、Ⅱ章4節、Ⅳ章5節……………	向坂剛二
Ⅲ章3節、Ⅳ章4節……………	山村宏
結言……………	大谷・平野・向坂・山村
5. 遺物の撮影は、執筆者の共同作業による。
6. 本書の編集には、執筆者の協力を得た。

挿 図 目 次

第1図	遺跡付近地形図及び遺跡分布図	3
第2図	横穴墳構造図	7
第3図	横穴墳副葬品配列復原図	9
第4図	変形神獸鏡拓影	13
第5図	装身具類実測図	13
第6図	須恵器実測図(その1)	15
第7図	須恵器実測図(その2)	16
第8図	須恵器実測図(その3)	17
第9図	土師器実測図	18
第10図	馬具類実測図(その1)	22
第11図	馬具類実測図(その2)	24
第12図	大刀類実測図	27
第13図	武器類実測図	29
第14図	袋井市大門大塚古墳出土器台	37
第15図	単・双竜式環頭大刀型式分類図	45

図版目次

- 図版第1 宇洞ヶ谷横穴墳の調査 1
A) 発見当時の工事現場
B) 墓道の調査
- 図版第2 宇洞ヶ谷横穴墳の調査 2
A) 墓道の発掘
B) 羨道部から支室内をのぞむ
- 図版第3 宇洞ヶ谷横穴墳の調査 3
A) 羨道部正面
B) 羨道入口の突出部
C) 羨道入口の突出部
- 図版第4 宇洞ヶ谷横穴墳の調査 4
A) 支室内石棺全景
B) 支室内部
- 図版第5 宇洞ヶ谷横穴墳の調査 5
A) 支室内入口付近の須恵器出土状態
B) 支室内東南部における須恵器と土師器の出土状態
- 図版第6 出土の鏡と装身具
A) 変形神獸鏡
B) 耳環と玉類
- 図版第7 出土の土器類 1
A) 器台と無蓋高杯
B) 甗
- 図版第8 出土の土器類 2
A) 有蓋高杯(第1類)
B) 有蓋高杯(第2類)
- 図版第9 出土の土器類 3
A) 脚付埴と提瓶
B) 台付埴と埴
- 図版第10 出土の土器類 4
A) 蓋 杯
B) 土師器 脚付埴・高杯および杯

図版第11 出土の馬具類 1

- A) 鉄地金銅張鏡板付轡
- B) 素環式轡

図版第12 出土の馬具類 2

- A) 鉄地金銅張杏葉
- B) 金銅製鈴

図版第13 出土の馬具類 3

- A) 鉄地金銅張鞍金具
- B) 木心壺錠と兵庫鎖

図版第14 出土の馬具類 4

- A) 兵庫鎖
- B) 鉄地金銅張辻金具

図版第15 出土の武器類 1

- A) 金銅製単竜環式および銀製円頭式柄頭
- B) 鉾・刀子および不明鉄製品

図版第16 出土の武器類 2

- A) 節大刀類(佩表)
- B) 節大刀類(佩裏)

図版第17 出土の武器類 3

- A) 鉄鎌(短茎平根式)
- B) 鉄鎌(有茎平根式と尖根式)

掛川市宇洞ヶ谷横穴墳

緒 言

本書で報告されようとする宇洞ヶ谷横穴墳は、掛川市し尿処理場建設予定地外であったとすれば、今日今まだ我々の目に触れることなく、雄大な奥津城として宇洞ヶ谷の谷深くに存在していたであろう程、発見そのものが偶然的なものであった。

掛川市がし尿処理場施設の建設をこの地に計画したのは、昭和39年4月であって実質的に着手したのは同年6月であった。工事は砂岩層で形成された宇洞ヶ谷丘陵に、ダイナマイトとブルドーザー併用の工法によって進行していった。6月15日丘陵の最高点を3m程度掘削した地点において、2m四方の落盤が起ったのが発見の最初であった。

落盤の起った位置は横穴墳の左側壁の奥壁よりの部分であって、最初に横穴墳内に入った工事関係者によって、落盤附近に埋納されていたと考えられる須恵器類と若干の鉄製品が、その日の午後掛川市教育委員会に持込まれた。同教育委員会はその報告を静岡県教育委員会に報告され、県教育委員会より筆者に連絡された。筆者は直ちに掛川市教育委員会に行き須恵器の数量と鉄製品中に鉄地金銅張の馬具破片が含まれていることを知り、この横穴墳が周辺で見られる横穴墳と異なる重要性を掛川市教育委員会に伝えると共に落盤箇所への立入禁止を願い、緊急調査の体制を整えるため遠江考古学研究会委員に連絡をとり、6月16日より調査を実施する旨、県教育委員会の承諾をとった。

6月16日我々が現地へ急行した時、既に周辺の住民によって副葬品の大半が外部に持ち去られ、内部は石棺の蓋が散乱する廢墟と化していた。

発掘調査はまず羨門の入口より着手すべく開始したが、玄室内では容易に確認出来る羨門の位置が外部からでは土砂の堆積と立木によって、全く位置を確認出来る状態ではなかった。工事の期限に制約され7日間の調査期間では昼夜の区別もなく、その上、堆積土の除去に機械力を使用することも余儀無く、最少限に機械を導入して堆積土を除去したところ、所謂前庭部に相当する施設は架設されず、羨門より丘陵裾に至るであろう墓道が架設された単独墳であることがまず確認された。

調査の行程は残存する副葬品の精査と構造計測に終始したが、玄室内は土砂の堆積は殆どなく、薄く埃を被った程度の堆積であった。このことは副葬品の持ち去られた原因でもあったわけである。

しかし持ち去られた副葬品は掛川市教育委員会関係者、地元の自治連合会諸氏の尽力によって過半は返済されたが総べてではなく、整理の過程において不足する多くの品があることが判明した。また報告される各項の内容においても副葬品の総べてが我々の精査による検出ではないため、その前後関係についても確かでない点を加筆しておく。

宇洞ヶ谷横穴墳報告書の稿を起すに当り、発掘調査に多大の御援助を賜った、掛川市教育委員会佐藤金一郎教育長（現三笠公民館長）、同岩井克己主事（現掛川市開発課）、同松浦金作主事（現掛川市教育委員会）、掛川市王子町自治連合会役員各位を明記して厚く感謝の意を表すると共に調査に参加協力された大崎辰夫氏（現北星中学校）、県立掛川東、西高等学校郷土研究室、周南中学歴史ク

ラブの諸君に改めて感謝の意を表する。

特に本書の出版に最も尽力された岩井克巳氏に執筆者一同心からお礼申し上げる次第である。

(大谷)

I 環 境

1. 地理的環境

掛川市の市街地より、約2km西に、倉真川と二瀬川が合流し逆川となる地点がある。

この合流点より少し南に、掛川駅を起点とする国鉄・二俣線、さらに500mほど南に東海道本線が通っている。この国鉄両線の中間附近が、掛川市下俣地区である。

逆川に沿った東側には、低い丘陵が南北に伸びている。この丘陵の基部に近い西斜面に、本横穴は築造されている。本横穴の地籍は、掛川市下俣字宇洞ヶ谷921番地の6に属している。

本横穴の所在する、掛川市附近は遠江地方のほぼ中央部を占め、中遠地方と呼ばれている。中遠地方の地形は、掛川市北部に三倉層を基盤とする三倉山地の末端部を形成する原野谷、和田岡の両丘陵を控えている。

又南には、小笠山塊が海岸線近くまで拡がっている。小笠山塊は、第3紀鮮新層を基層とし、洪積世の砂礫層からなる低い山塊である。小笠山塊は北麓から西南麓にかけて開折谷が発達し、大小無数の丘陵が形成されている。本横穴の所存するのここうした丘陵の末端部をなす支丘陵の一つである。これを特別な名称はないが記述上、下俣丘陵と呼称する。

下俣丘陵は、基底部でも幅150m前後で狭く、高さも40~50mの等高線によって表わされる低い丘陵で、東は沖積地に接し、西は逆川が丘陵裾を流れている。すでに侵蝕によって、砂礫層は頂部に僅かに堆積を認められるのみで、全体に鮮新層の露頭が認められる。

下俣丘陵は、北から西にかけて、逆川を始めとし、垂木川、原野谷川、太田川などの大小の河川によって形成された、肥沃な中遠沖積平野を控えた沖積地の奥まった位置を占めている。

2. 歴史的環境

本地域の歴史的環境について概観すれば、数多くの丘陵と大小の河川によって形成された沖積平野を控え、自然条件に恵まれているため、多くの遺跡が残され、古代文化の繁栄を物語っている。

縄文時代遺跡は、小規模ながら原野谷、和田岡、小笠山麓に縄文中、後期の遺跡が散在している。次の弥生時代になると、逆川流域に3ヶ所、原野谷川流域に3ヶ所の遺跡が知られている。いずれも菊川式土器を中心とした弥生後期の遺跡である。しかし、領家遺跡が一部調査されたのみで(樋口1937)他は総べて未調査であるが、遺跡の状態よりかなり大規模なものが推察される。また、宇洞ヶ谷より約1kmほど南に、「掛川史稿」に記載されている明和9年5月に発見された、長谷小出ヶ谷銅鐸の出土地点と推定されるところがある。弥生後期には、逆川流域を生産の場とした農耕社会が形成された集落の存在が推察される。

概要が明らかにされたのが始まりである。その後、国鉄東海道新幹線建設工事に伴い、袋井地蔵ヶ谷横穴群（平野他1965）、掛川城山横穴墳（平野他1964）の発掘調査が実施された。さらに、東名高速道路建設工事に伴い、掛川本村横穴墳（平野・向坂1966、尾藤1968、宮本・植松1968）、掛川岡津A群（平野・寺田1968）、岡津B群（大谷・山下1968）、菊川下本所横穴墳（内藤・藤田1968）を始めとし、本例、磐田向笠横穴、八幡山横穴など各種の開発工事に伴う調査が実施されている。

これら一帯の調査にもとづき、中遠地方の横穴墳の研究成果を要約すれば、①横穴墳は数基を単位とし、墓域を共有するのが一般的であり、城山及び本墳など単独に築造される例は特別である。②墓域を共有しているが、玄室、羨道に続き長い墓道を有し、一基ずつ独立した構造をもつ本村A群、下本所例などが古式の形態を示している。③出土遺物は、須恵器を中心にして、直刀、鉄鏃等武器が主な副葬品であるが、下本所横穴群の馬具類、装身具類、本村A群の装身具類、岡津B群の銅鈴、地蔵ヶ谷3号横穴の金銅製飾金具などが注目される。一般的に副葬品の質、量ともに乏しいなかにおいて、本墳と古い発見例であるが、袋井飯田観音寺本堂横穴（静岡県1931）の金銅装環頭大刀、金銅装頭椎大刀を始め、馬具類、装身具類の出土例は異例である。

④同一横穴より出土した須恵器に2型式以上の型式差が認められる、下本所例、地蔵ヶ谷、本村A、B群、岡津A、B群例などから追葬が行われていたことが明らかである。⑤次に横穴墳より出土した須恵器より各横穴墳の築造された年代について考えれば次表の通りである。

横穴墳名称	須恵器編年	第Ⅲ型式		第Ⅳ型式		第Ⅴ型式	
		前半	後半	前半	後半	前半	後半
城山横穴		—					
本村A群		—	—				
〃 B 〃					—		
岡津A 〃		—	—				追葬
〃 B 〃			—				
下本所横穴群		—	—				
地蔵ヶ谷 〃				—	—		

中遠地方の横穴群のうち、城山、本村、下本所においては、6世紀中頃以前よりすでに横穴の築造が始まっていることを示している。

こうした古墳時代の背景をもった本地域は旧事記にみられる素賀國に、大田川、原野谷川流域を久努國に比定することも可能ではないかと考えている。

（平野）

（註）

1. 昭和43年発見、磐田市教育委員会で緊急調査。
2. 斎藤忠氏は、袋井市から磐田市にかけての地域を久努國と推定されている。

Ⅱ 構 造

1. 横穴墳の構造

本墳は、玄室・羨道・墓道^(G1)の三部分よりなり、玄室には棺が造りつけにされている。

まず玄室は、最大巾4.36m、奥行左袖で6.4m、右袖で6.1mの隅丸長方形である。天井部の高さは、剥落があって正確さを欠くけれども、2.55～2.6mを測る。

側壁の1m位から上部には、天井の頂に向かって、きれいな整形痕が残っていた(図版第4B)。天井部はドーム状を呈する。また、図には表現していないが、側壁の1.4m前後の高さに50～60cmの間隔で穿孔が並んでいたが、その中には、鹿角とおぼしき骨片が遺存するものがあった。これは類例がない。

玄室の中央には、巨大な棺が作り出されている。長さ4.5m、中央部の巾3m、床から棺の縁までの高さ0.9mである。これは、横穴を掘り込む時に、予め掘り残しておき、それを整形したもので、いわば造りつけの棺である。粘土層を掘り残して作ってあるから、粘土棺に違いないのだが、柔かい泥板岩ということで、石棺と呼ぶこともできる。

棺の上縁は、入口に向かって若干傾斜しているが、これは玄室の傾斜とほぼ等しい。また上縁は、奥側で2.2m、前方で2.1m、同一面となるように整形してあるが、最奥部に8cmの段をつけて、テラスが設けられている。

棺側には、正面に3、向って右側に5、左側に4、合計12ケの台形突起が彫出されている。この部分は、棺上縁から40～50cmまでの範囲に取められており、ていねいに整形されていて、棺を作る意識が明確な部分である。ところがこれより下半部は、粗い作業のまま整形痕が認められない。

棺体の中央には、巾100cm、長さ285cmの隅丸長方形の掘り込みがあって、奥で90cm、入口に近い部分で75cmの深さがある。入口に近い方に向かって右側に寄せて、径15cmの孔があげられており、棺体の外に導かれているが、孔の入口には栓が挿入されていた(図版第4A)。なお、棺には蓋があったはずで、これに相当する板状の粘土板が玄室内に遺存していた。しかし、最初、横穴に入った人々の話では、蓋はかぶせた状態で完存してはいなかったようである。

次に、羨道についてみると、巾1.05m、高さ1.8～1.9m、長さは天井で測ると1.45mであるが、閉塞石の端から玄室袖部までは、向って右で1.15m、左で1.25mである。ところが閉塞の端の両側には、巾20数cm、高さ50～60cmの突出部がある(図版第3B・C)。さらに、これと対応して、羨道の向って左壁奥(袖から20～30cm手前)には、掘り込みがある。右壁にはなかったようである(図版第4A左下端)。

羨道部には円礫280個が積み上げられていたが、床から80cm以上には及んでいなかった。本来密封されていたはずであるから、いつの時代か判らないが、なかば開口していたことになる。閉塞の円礫群の最下段には、一部泥板岩の板が使われていた。しかもそれが床から若干浮いていたのも気がかりな点である。

墓道は、羨道入口から真直に延びて、5～6mまで調査したが、まだ続いていた。羨道入口で、床から現地表まで3.5m余あったから墓道は相当長かったとみられる。墓道は二段作りになっている。

巾2mほどの掘り込みに、さらに巾1mほどの溝を、掘り込んだというものであるから、溝の両側に巾50cmほどのテラスができることになる(図版第2A)。^(註2)

以上が、この横穴墳の法量と構造の概略であるが、本墳の全長は、羨道入口の突出部前端から奥壁まで、8.5~8.6mとなるのである。

さて本墳は、規模の大なること、巨大な造りつけの棺を有すること、羨道入口に突出部を設けること、長大な墓道をつけることなどに特異性がみられる。

遠江地方においては、現在横穴墳の数は、およそ770基を数える(静岡県教委1961)が、そのほとんどは、数基単位で前庭部を共有するのである。つまり、丘陵中腹に広いテラスを作り、そこから中央・左右というように、横穴を掘削するのである。しかし、1基づつ墓道を掘削し、その奥に横穴を掘り込むという例も若干知られている。小笠原菊川町下本所横穴墳(内藤・藤田1968)や掛川市本村横穴墳A群の第1~4号墳などがそれである(尾藤1968)。宇洞ヶ谷横穴墳との相違は、両側のテラスの有無ということにならうか。いずれも6世紀中頃と推定される。

次に羨道部入口両側の突出部と奥の掘り込みであるが、これについても、本村横穴墳A群の例は関連性がある。特に、A1号墳とA2号墳では、羨道部の両側に縦位の溝を掘り込んである。A1号墳では閉塞も完存していたが、この溝の意味は充分解明されていない。宇洞ヶ谷では、閉塞最下段に泥岩の板を置いてるところをみると、この突出部は、当初ここに板状の泥岩を、はめ込むために設計されたのが、後の追葬か何かの事情ではずされたあと、旧に復さず今度は円礫だけを積みあげたというように解されるのである。本村A群の例も、もてこの溝に粘土板をはめて塞いだものではなかったらうと考えられている。この他に突出部、または溝をもつ例はないようだ。

次に、棺についてだが、このような型式の例は、寡聞にして知らない。板状の泥岩を切り出して組み合せの棺とすることは、古くは磐田市こしき塚古墳^(註3)に存し、横穴墳にもままた例を見る。また、作りつけの棺床を設けた例は、掛川市城山横穴墳(平野他1964)などにある。宇洞ヶ谷例は、そうした棺や棺床とは全く異なるものである。その最大の特徴は、正面と左右に刻まれた台形突起であるが、これは家形石棺などに見るものと類似している。奥壁の側にないのは省略であろうが、家形石棺の突起と比較してみると、かなり新しい型式の家形石棺に相応するようである(小林1931)。これは後に述べる遺物の年代観と矛盾するところがある。

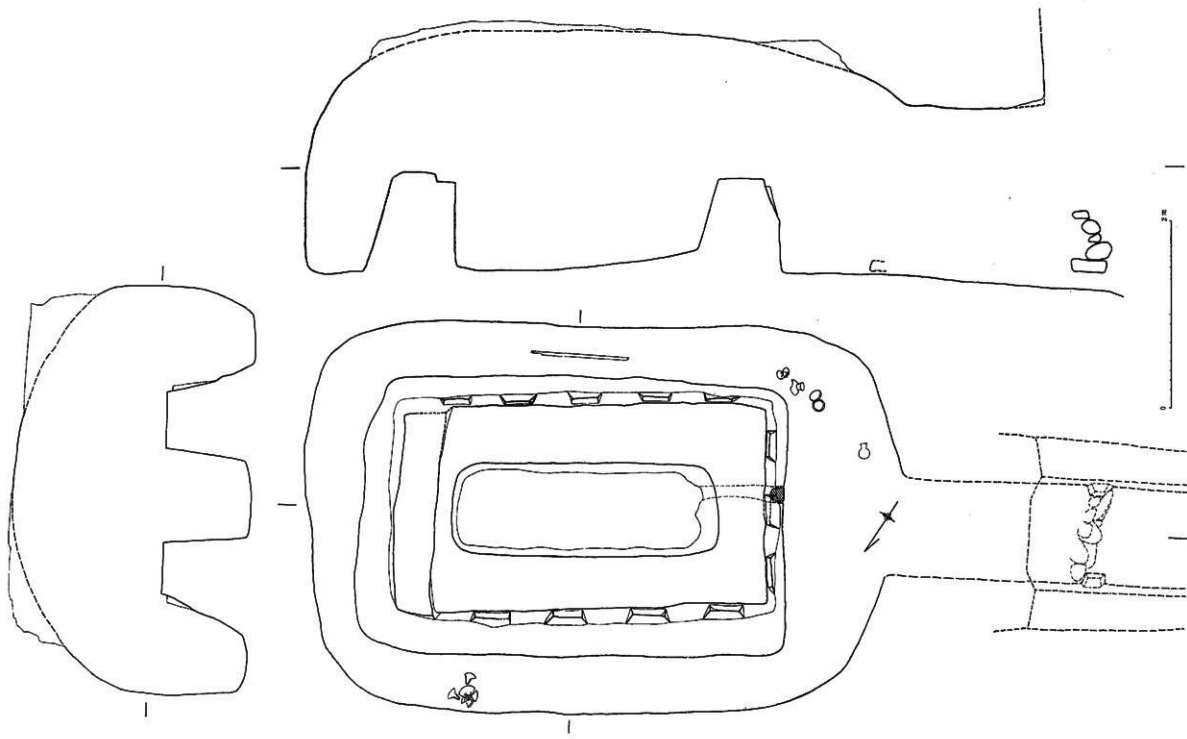
最後に規模の大きい点について言及すると、従来遠江地方での最大の横穴墳としては、上述した本村横穴墳A4号墳が知られていた。これは、最大巾400cm、玄室長さ385cm、天井の高さ195cm、羨道入口から奥壁まで500cmであるから、宇洞ヶ谷横穴墳はこれを大巾に大きくしたものとえよう。

要するに、長大な墓道・羨道部の突出・玄室の平面形などからすれば、本墳の営まれた年代は、須恵器編年の第Ⅲ期中葉を降らないといえそうである。

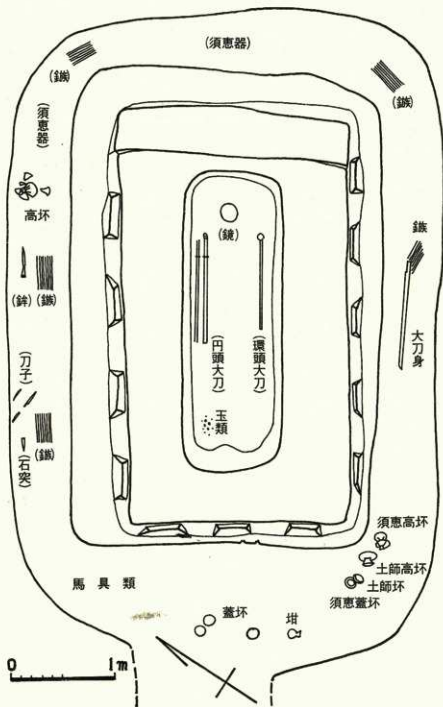
2. 副葬品の出土状態

緒言に述べられたとおり、本墳は発見と同時に内部を荒されたので、大部分(特に棺内)の副葬品は、その原位置が不明となってしまった。

そのあと、緊急調査を実施したところ、玄室の前半部に副葬品の遺存する部分があった。しかし、



第2圖 漢代長壽寺遺址圖



第3図 横穴墳副葬品配列復原図
 ()内は、聞き込みにより位置を推定

工事は急を要していたし、調査体制も充分でなく、かつ夜間の警備がむずかしい状況にあったので、出土状態の正確な記録がとれなかったのは残念でならない。

緊急調査によって発見された副葬品は、棺内の西隅でみつかった大形のガラス玉1点、棺外東側に副葬されていた大刀身と尖根式鉄鎌群、玄室袖部南隅の須恵器と土師器、袖部西隅の馬具類一括、棺西側奥寄りの須恵器高坏1点などである。これらに発見当初中に入った人達からの聞き込みから、原位置を想定して加えたものが、第3図の副葬品配列復原図である。括弧でかこんだのは、聞き込みによる推定位置を示している。

棺内奥寄りに、鏡、東壁沿いに環頭大刀、西壁沿いに別の筒大刀があったという。そうすると、後にわれわれが得た大形のガラス玉の位置は遺骸の足元に当り、やや不可解な点を残す。鉄製武器類は、棺外西側に置かれていた。土器群は、2個所に分けておかれていたことは確かである。先に持ち出されたのは、棺外北隅から奥壁寄りにあったということであり、それらは第1類の須恵器であった。後の緊急調査で出土土器群は、棺の正面から南側にかけて並んでいたが、これは主として第2類に属するものであった。追葬と考えるべきであろうか。馬具類一括が棺外西隅に置かれていたことはすでにみたとおりである。

なお、羨道部の閉塞石が、棺の前へ崩れ落ちていたが、その縁群の下には、粘土板（あるいは泥板岩の板石）が倒れていた。これが棺蓋の一部であったとすると、閉塞石の上半が欠けていたことと共に、追葬か何か行なわれた証拠となろう。

これらの崩れた閉塞石や板石の下から馬具類が発見されたのである。

(向坂)

(註)

1. 羨道と墓道は、同鏡語だが、天井の有無と、閉塞部の前後で、両者を使い分けようとしたのである。
2. 発見直後、緊急調査中に、斎藤忠・三宅敏之両氏が掛川市へ見えて、この横穴墳の保存対策が協議された。その結果一応現状保存との結論が出たようであるが、最終的には保存できずに消滅してしまった。緊急調査は、雨期だったため難行し、図面の作製は、横穴の内部だけ不十分ながら済んで、羨道・墓道の調査・測図へと移る予定であったが、その間に、横穴墳は完全に姿を消してしまった。したがって、極めて不備な測図しか公開できなかった。
3. 昭和34年冬調査。報告書未刊。資料は磐田市に保管中。

Ⅲ 副 葬 品

本墳は、構造的にみて遠江地方の横穴墳中特異な存在であることは、前章でみたとおりであるが、その副葬品も質量共に優れている。列挙しよう。

1. 鏡および装身具類 11点

変形神獸鏡 1面、金環 1個、銀製空玉 4個、ガラス玉 4個、類トシボ玉 1個

2. 土器類 49点

須恵器 46個体分、土師器 3個体

3. 馬具類 22点

轡 2組、杏葉 3枚、金銅鈴 6個、鞍金具 2領、鞆 2足、辻金具 4点、その他5

4. 武器類 239点

大刀 4口、鉞 1口、刀子 5口、鉄鎌 229本分以上 合計 313点

ただし、これで副葬品のすべてであるかどうかかなり疑問がある。緒言でも触れたとおり、発見当時の特殊事情があるからで、相当量のもの（特に装身具類において）が、持ち去られているとみねばならない。

1. 鏡および装身具類

鏡（図版第6A・第4図）

聞き込みでは、鏡は棺内に取められていたという。出土状態は明らかでない。変形神獸鏡である。本鏡は、全体的に鉛黒色を呈し、光沢もあり、材質の良質さを証している。鏡面及び鏡背に緑錆が部分的に付着しているが、欠損はなく完形である。

鏡の大きさは、面径15cm、面反り0.3cm、鈕径2.5cm、鈕高1.1cmである。

鏡背の図文は、内区を、花卉座をもつ小乳によって四分し、小乳の間に、正面を向いた神像が配されている。さらに、小乳をかこんで環状に、鳥禽形と獸形が配されている。

神像、鳥禽形、獸形ともに、表現は簡略化され、線表出されている。

鏡背の図文としては、特異な部類に属しているので、さらに精細に記述すれば次の通りである。

神像とおぼしき人物像は体軀の表現に相違が認められ、立像と座像が交互に配置されている。立像には翼状の背文が表現されているが、座像には背文は表わされていない。

鳥禽形とした図像は、頸部を長く伸ばし、大きな嘴を開いて、あたかも尾羽をついばむ様な形に表現されており、乳を中心にして環状をなしている。

鳥禽形のうち、2体は左向き、1体は右向きになっている。立像の左側^にあたる位置に配されている像は、他の鳥禽形とは頭部の表現が異なり、嘴もなく獸形を表わしている。

以上のように、内区の図文は、神像4体と鳥禽形3体、獸形1体によって構成されている。

内区外周には、半円方格帯がめぐっているが、銘文は全くなく、半円内は重弧文状に、方格内は四等分され、各区内に小円が鋳出されている。

外区は、唐草文状の図形を中心にして、意味の不明な図形を混じているが、全体の図形としては擬
画文帯がめぐらされ、鏡縁は平縁をなさず小さな三角縁状の素縁をなしている。

前記のように、図文はすべて線表出され、しかも、簡略化がいちじるしいが、縁飾の付着している
部分を除いては、図形に鋳崩れは認められず細部の線まで鮮明に鋳出されており、鋳上りは良好であ
る。

装身具類 (図版第6B・第5図1~7)

金環 1個(1)

環体の形は、やや楕円形をなし、大きさは長径3.7cm、短径3cmあり、直径は0.6cmである。

環体の地金は不明であるが、薄い金銅板で全体を被覆している。表面に緑錆が付着している箇所も
あるが、破損したところはなく保存状態はきわめて良好である。

1対であるべきであるが、本発掘では1個体しか発見できなかった。金環としてはごく普遍的に出
土するもので特記すべきものはない。

銀製空玉 4個体分(2・3)

薄い銀板を半球形にプレスし、半球形を2個合せて、その縁を膠着させて空玉を作ったものであ
る。形状は球形と言うよりも、扁平な球状をなし、ちょうど銀杏形を呈している。膠着させた側縁
に、上下に2孔を穿っている。

今回出土した空玉中、完形を保っているのは、僅かに1個体にすぎず、他は1個体を保ってはいる
が一部破損しているものが1個と、膠着が離れて半球形になったものが3個が発見された。

空玉の大きさは、いずれもほぼ同じで長径1.8cm、短径1.7cm、厚さ1.4cmである。

空玉の表面は、銀灰色にくすんでいるが、分離した内側は鮮やかな銀色を保ち、往時は白金の玉と
してその華麗な美しさがしのばれる。

ガラス丸玉 4個(4・5・7)

ガラス丸玉は、完形品2個と一部に風化があるもの1個、破片1個体出土した。

4・5は、紫紺色をなし、4は縦1.7cm、横1.6cmの大きさで、孔の径0.3cm、5は、縦1.8cm、横2
cm、孔の径0.5cmの大形な丸玉である。7は地色は青色であるが、部分的に風化し侵蝕されて色を失
い、乳白色を呈すが、青色を地色とした、練玉の一種ではなからうか。大きさは、縦1.4cm、横1.8cm、
孔の径0.5cmである。丸玉の上下端は平に磨かれた痕が認められる。

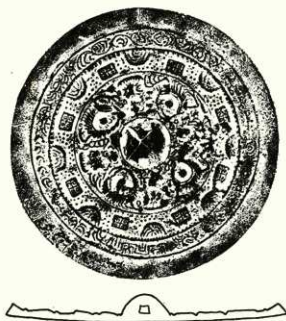
類トシボ玉(6)

本墳から出土した丸玉1個に、紫紺色の地色に黄色、緑色のガラスを熔着させて斑文3個を表した
ものがある。大きさは、縦1.7cm、横2cm、孔の径0.5cmを測る。丸玉同様、玉の上下端を磨いてい
る。ここで類トシボ玉としたのは、斑文が象嵌されたものか、練合されたものか明らかでないので、
類トシボ玉と仮称した。

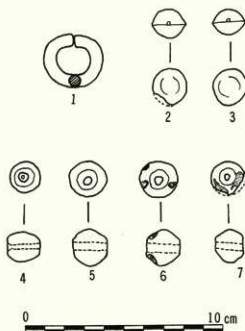
(平野)

2. 土器類 (図版第7図~第10図・第6図~第9図)

土器類の総数は、須恵器45点、土師器3点の48点である。この内調査中検出した土器は須恵器6
点、土師器2点のみで他は全て発見当初のものである。調査中検出した土器は支門附近に大体ままと



第4図 変形神獸鏡拓影



第5図 装身具類実測図

って1つのグループをなしていて、これらが発見当初出土の須恵器と形態的特徴を異にするものである故に分類の上で二分してみた。

須恵器第1類 (1~26)

第1類土器は有蓋高杯を主体とするグループで、有蓋高杯8、無蓋高杯3、器台、提瓶、台付広口罎、壺各1である。

提 瓶 (1)

口径19.8cm、器高25.6cmを計測する提瓶は、口縁部に二段の明瞭な線を設け、頸下部に2本の沈線を巡らし、その間に櫛状器具による波文が加えられている。胴部は側断面で大鼓形を示す扁平で、その回りを櫛描文が巡っている。焼成は良好で、球形胴部側は緑茶色の釉着がみられ、全体の色調は灰色を呈している。

器 台 (2)

口径25cm、器高24.5cmの計測が示す数値は器台としては最も小さな類であるが、形態的には整った形状を呈し、口縁部と脚端部の稜は僅かに円味を有し、杯部と脚部にそれぞれ2本の沈線を巡らしている。また杯部と脚部とは2本の沈線によって区分され、各沈線で区分された間には櫛描文が施されている。脚部は中段の沈線を境に長台形二段三方透かしが穿たれている。焼成は硬質良好で、器面には緑色釉着がみられ、全体の色調は青灰色を呈している。

蓋 (3・4)

4は5の台付広口罎にセットされる蓋であるが、3の蓋は形態的特徴からもあまり見聞きしない器である。色調は黒味がかかった暗灰色を呈し、焼成は精製された胎土と共に良好である。

台付広口罎(5)

所謂直口罎と称せられる器であって、脚高1.4cmの付高台をし、肩部の張りがやや肩下がりで円味を帯びているほか、さして特徴はない。焼成は硬質良好で器面全体暗灰色を呈している。

壺(6)

口径21.4cm、器高38.4cmの数値を示す壺は頸部に2本、胴部に1条づつ4本の沈線を配し、口唇下部より頸部にかけて比較的刻みの深い櫛描直線文を施し、胴部全体に同器具による短斜線文を配している。底部周辺は粗雑な格子状に櫛状器具によって整形がなされている。焼成は硬質良好で、器面は黄緑色の釉着がある。

無蓋高坏(7~10)

4点共にそれぞれ特徴を異にするものであるが、7、9は比較的類似する器である。坏部の腰張りが稜によって明瞭化され、その2段の稜間には櫛描斜線列を配している。12.9cmの脚高を有する脚部は2本の沈線で上下を区分され、それぞれ上下に長方形三方透しが穿たれている。8は小形の器で脚部三方に径0.8cm円形透しが穿たれている。時期的にも比較的古式に属するものである。10の高坏脚と推定される器は、脚下段に長台形の一段四方透しを穿った色調も黒味を帯びた暗灰色を呈し、第1類中でも比較的時期を異にするものかとも考えられる。

有蓋高坏(19~26)

口径15.2cm~16.9cm、器高19.8cm~25.3cmを示す数値はセットとして整った数値である。特徴的にもさして異なる点を見出せない。強いて言えば、脚部中段と脚張出部にそれぞれ2本の沈線を巡ぐらす器(19~24)、脚張出部に1本の沈線を巡ぐらした器(25、26)に区分出来よう。この器に伴う蓋は円盤状のつまみを有する(11~15)と円盤状つまみの頂点を凹めた(16~18)とが存在するが時期的差異はないものと思われる。焼成は総て良好で、器面には緑茶色、乳白色の釉着が認められる。

須恵器第2類(27~45)

第2類土器は有蓋高坏と蓋坏から成るグループで、口径、器高の計測値が小さくなる器である。調査中検出した土器は、第2類に属するものである。

脚付長頸罎(27、29)

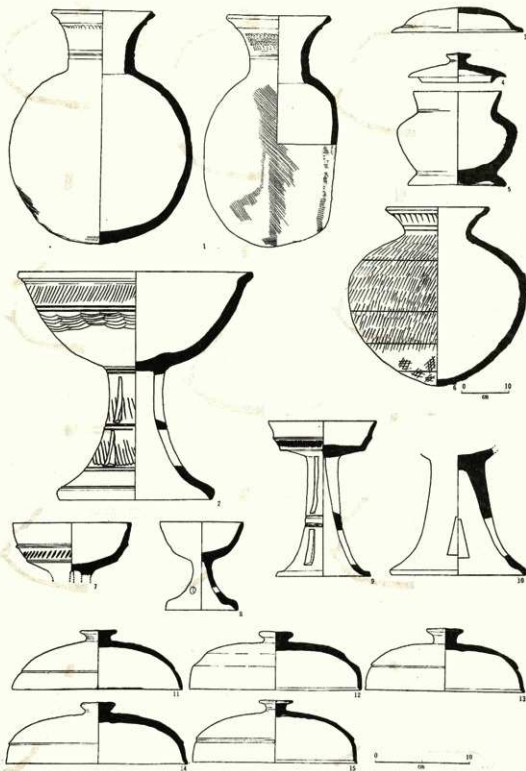
27は脚部を欠しているが胴部に2本の沈線を巡ぐらし、その間に櫛描斜線列を配し脚部は長方形2段三方透しを施し、その間を2本の沈線が巡ぐっている。29は胴部、脚中段、脚張出部にそれぞれ2本づつの沈線を配す他に施文はなく、脚中段の沈線によって区分される長方形三方透しが施されている。この器には28の円盤状つまみを有する蓋が伴うものである。両者共に焼成良好で色調、胎土は黒味を帯びた暗灰色で硬質な器である。

高坏蓋(30)

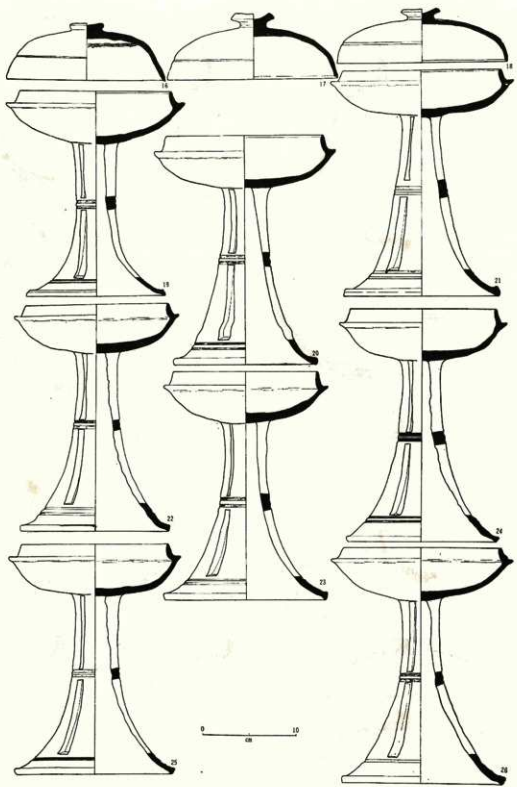
口径14.8cm、器高4.8cmのこの蓋は器面全体にロクロ目を残し、頂点に扁平円盤状のつまみを有する粗製の器である。

坏蓋(31~33)

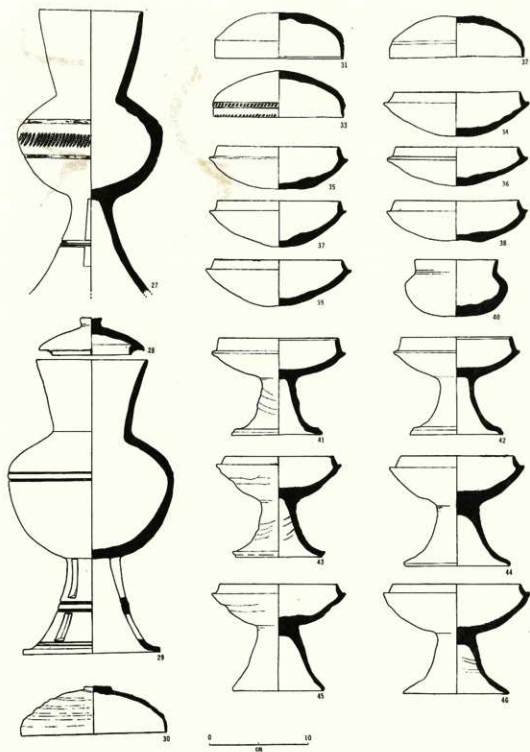
口径13.2cm~13.6cm、器高4.2cm~4.9cmを示す数値と、肩部に稜を有して口唇部にかけて垂直に近い状態で接しているのが特徴である。32にみられる如く肩部の稜間に沈線を巡ぐらし稜を圧痕列によっ



第6図 須恵器 尖 湖 図 (その1)



第7圖 須 惠 器 突 濁 図 (その2)



第8圖 須恵器実測図 (その3)

て圧消している。この圧痕列は口唇部にも僅かに何われ、手法的には器を軽く転がした感がある。31に僅かに歪みがある他は焼成、胎土共に良好である。

杯 身 (34~39)

口径12.4cm~13cm、器高4cm~4.7cmが示す数値は31~33の蓋がセットされるものであって、蓋受部の立上り高1cm~1.2cm、傾斜角20~25度である。36、38に僅かに歪みがある他は焼成、胎土共に良好である。

有蓋高杯 (41~46)

口径11cm~12.8cm、蓋受立上り高0.9cm~1.4cm、傾斜角20~25度が示す数値は杯身の数値と差異は認められない。41、42にみられる口唇内側に沈線を巡らした器が含まれる他、脚部にロクロ捲上痕が裝飾的に施されている41、43、46がある。

土 師 器 (第9図47~49)

土師器は脚付埴 (47)、杯 (48)、高杯 (49) の3点であって、48、49の土器は須恵器第2類と同一地点より検出されたものである。

脚 付 埴

小形丸底埴に脚を付けたような器であって、器面は丁寧に整形され、胴部に僅かに刷毛目を窺うことが出来る。

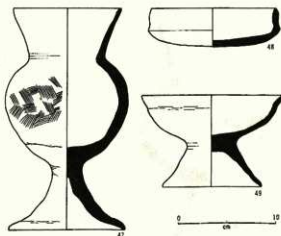
杯

胴下部において最大の張出しが認められ、その部分が稜として表現されている口径12.6cm、器高4cmの焼成、土質共に良好なものである。

高 杯

口径14.7cmで口唇部をやや外反させた杯部に脚付した器で、器面全体丁寧に整形されている。

(大谷)



第9図 土師器実測図

出土土器計測値表

図版 番号	器 種	口径	器高	最大径	脚径	脚高	色 調・胎 土・焼 成	備 考
1	提 瓶	19.8	25.6	19.6			灰 色・硬 質・良	釉
2	器 台	25	24.5		16.4	14	青灰色・硬 質・	釉、二段三方透
3	蓋	14	2.7				暗灰色・	身不明
4	◇	7.3	3.2				青灰色・	
5	台付広口罎	9.3	10.3	12.6			青灰色・硬質小砂混・良	
6	壺	21.4	38.4	38.2			灰 色・硬 質・良	釉
7	無蓋高杯	12.1	-	-			暗灰色・硬 質・良	脚部欠
8	◇	9.8	9.5		7.9	5.3	灰白色・軟 質・	円型三方透
9	◇	11.6	16.7		10.2	12.9	暗灰色・硬 質・良	二段三方透
10	◇	-	-		14.5	12.4	◇・◇・◇	杯部欠一段四方透
11	高杯蓋	18.3	6.5				◇・◇・◇	釉
12	◇	18.6	6.2				◇・◇・◇	釉
13	◇	17	6.8				◇・◇・◇	釉
14	◇	19.6	6.7				◇・◇・◇	
15	◇	17.8	6.8				◇・◇・◇	釉
16	◇	17.3	6.1				灰白色・軟 質・	歪
17	◇	18.4	7				青灰色・硬 質・	
18	◇	18.2	5.8				◇・◇・◇	
19	有蓋高杯	16.2	22		14.8	16.5	◇・◇・◇	二段三方透
20	◇	16.9	19.8		15.4	19	暗灰色・	釉
21	◇	16.8	24.3		16.8	19.5	◇・◇・◇	釉
22	◇	15.2	24.6		16	19.2	◇・◇・◇	◇
23	◇	15.5	24.5		17.4	19.2	◇・◇・◇	釉
24	◇	15.4	24.9		15.8	19.4	◇・◇・◇	釉
25	◇	15.7	24.8		16.7	19.5	◇・◇・◇	釉
26	◇	16.4	25.3		17	19.6	灰白色・	◇
27	脚付長頸罎	10.6	-	14.9			暗灰色・	脚部欠二段三方透
28	蓋	8	2.9				青灰色・	
29	脚付長頸罎	11.2	27	16.9	13.8	9.7	◇・◇・◇	二段三方透
30	高杯蓋	14.8	4.8				◇・軟 質・粗	
31	坏 蓋	13.2	4.8				◇・硬 質・良	歪
32	◇	13.4	4.9				◇・◇・◇	正真列
33	◇	13.6	4.2				◇・◇・◇	
34	坏 身	12.7	4.4				◇・◇・◇	
35	◇	12.4	4.5				◇・◇・◇	

図版 番号	器 種	口径	器高	最大径	脚径	脚高	色調・胎土・焼成	備 考
36	杯 身	12.5	4				灰白色・硬質・粗	丕
37	◇	12.6	4.7				◇・◇・良	
38	◇	12.5	4				青灰色・◇・粗	丕
39	◇	13	4.7				◇・◇・良	
40	広口 埜	8.3	5.8				◇・◇・◇	
41	有蓋 高杯	12.2	9.8		8.8	5.8	◇・◇・◇	
42	◇	11.5	9.9		9.4	5.9	◇・◇・◇	
43	◇	11	10.2		8.8	6	灰白色・◇・◇	丕
44	◇	11.4	11.1		10.4	6.1	◇・◇・◇	丕
45	◇	12	11		9.2	6.8	◇・◇・◇	丕
46	◇	12.8	11.3		10.7	6.3	◇・◇・◇	良
47	土師脚付埜	11.2	23		12.2	6.7	濃赤色・良好・良	刷毛目文
48	土師 杯	12.6	4				◇・◇・◇	
49	土師 高杯	14.7	9.5		10.4	4.4	◇・◇・◇	

3. 馬 具 類 (図版第11~14・第10、11図)

本古墳から出土した馬具類は、鞍2・鍔2・轡2・杏葉3・馬鈴6・雲珠1・辻金具3・鉸具2・紙留金具3等がある。

鞍 2背のうち1背は前輪・後輪の礎金具、覆輪的要素を認められる紙留縁筋金具があり、いずれも鉄地金鋼張によるものである。

前輪の礎金具は高さ16cm、最大巾である爪先の巾30cm、左右の礎を結ぶ洲浜形の高さは6cm、巾は10.5cmである。前輪には鞍がなく、礎金具の縁辺を巾0.5~0.7cm、厚さ0.1~0.15cmの縁金具が一周し、縁金具と本体を長さ0.5cm、紙の頭径0.3cmの小型紙が並列して0.5cm間隔に留められている。

後輪の礎金具は、高さ18cm、最大巾の爪先で36.5cm、洲浜形の高さ1.5cm、巾12.5cmで前輪よりやや大型である。形状は、前輪礎金具と同類であるが、礎中央に鉄製鞍金具が左右一対で装着されている。

鞍の鉸具は、ほぼ円形の座金上に装着し横巾のあるもので、釘足は長さ4.5cm、釘身には斜行する木目の残痕が認められる。

紙留縁筋金具は、巾0.6cm・厚さ0.15cm・紙の長さ0.5cm・紙頭径0.3cmの小型紙を並列に0.5cm間隔に打込んだものである。金具の裏面には木地残痕が曲線内側に向って認められ、外側で木地が切れていることから海の周縁をめぐる覆輪的筋金具と考えられる。海に面する金具内側には薄い金箔と漆の残痕がある。このことから海は木地上に漆・金箔が張られていたことが認められよう。

次の一組は、8片による礎金具残欠であるが左右一対をなすもので、その形状も大きさも前記礎金具と全く同類で鉄地金鋼張であり、後輪に鉄製鞍を装着している。

以上2組の鞍は、礎金具において全く同型式を示しながらも、前例は木心漆地金箔装の鞍橋に覆輪

的縁飾金具を備えた精製品であった。後例は縁飾金具をめぐらした痕跡がなく、おそらく海部の木心を漆地金箔装で飾った並製鞍種であると推察される。

鎖 兵庫型のもと、兵庫型の変形の2種2組がある。

兵庫型は、鉸具と3連の鎖、その先端に錠の取付金具の順序で1連をなす1対は、全長約24.5～25cmのものであり、鎖は径約0.8cmの鉄丸材を使用している。

1対のうち保存良好な一方は、鉸具の長さ8cm、壺の部分の最大巾は5.5cm、鉸具の取付座は舌を中心に左右が第1鎖の先端で舌を挟んで組込まれている。第1鎖の長さ8cm、第2鎖の長さ7.5cm、第3鎖の長さ7cmで、第3鎖の下方の環内に扁平な錠取付金具の中央部附近が径3.7cmの半弧状になって残存している。1辺の巾は1.7cm、厚さ0.5cmのものである。もう一方の鎖は、鎖具の欠損がはなはだしく鉸具の取付座があるのみで第1鎖につながる。第1鎖の長さ8cm、第2鎖の長さ7.5cm、第3鎖の長さ8cmで前者の鎖より第3鎖は1cm長いものである。第3鎖下端の環内に直径約1cmの円形状をなす錠取付金具の中心部残欠が弧状になってわずかながら残存している。

次に兵庫型の変形の鎖は、鉸具と第1鎖の1部と、先端を欠損した第2鎖と第3鎖、それに接続する錠取付金具の残痕一部を有する2片がある。第1片は、鉸具座と舌を有して他は欠損したもので座には第1鎖の先端の一部が残存している。舌は長さ9.5cmに及ぶ大型のものである。

第2片は、第2鎖が中央部で欠損し、下半分が第3鎖と連結している。第3鎖は長さ10.5cmあり、鎖の環が兵庫鎖のそれと比較して横に広がらないものである。両端の環部は次の鎖と連結できるだけ最少限の円形にとどめその間を直線的に径約0.8cmの鉄材で加工したものである。

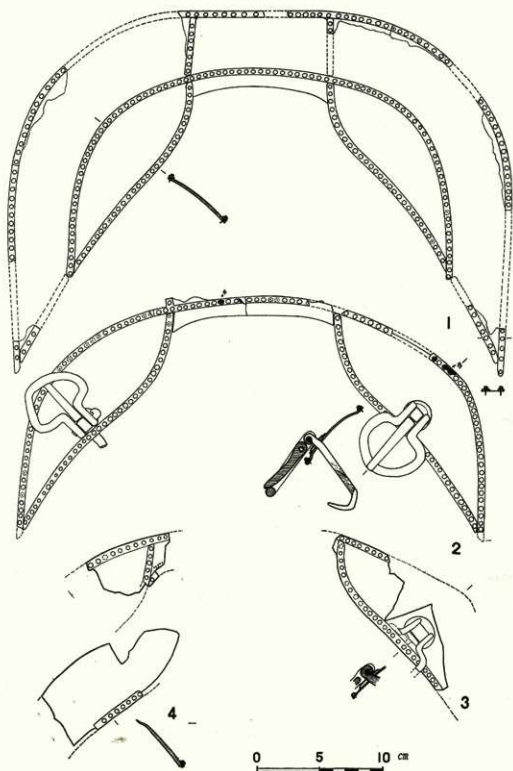
錠 本体は木製のため腐朽して取付金具の断片11点がある。錠組部に残存する金具断片から鉄金具付木製壺錠であったことがわかる。兵庫鎖の第3鎖に装着の残痕が見られる取付具の断面は逆U字形を呈し、それより木製壺錠を支持する梁状金具は巾2.3cm、厚さ0.2cmの細い板で叉状に延びている。その長さは明らかでないが、末端部は巾1.3cm、厚さ0.2cmと巾が細まり丸味をもった山形で終わっている。金具の板中央には約3cm間隔に紙が打たれ、金具裏面に縦木目の木片残痕が認められるもの4点がある。

なお、錠組の鉸具を馬の腹部に対して平面状に取付けると、錠は腹部に並行して懸垂されたことが、鎖・錠の取付金具のあり方から推察できる。

馬鈴 銅地金張製の鈴6箇体と、それに附属する鉄地金銅張の円盤形座金6箇がある。鈴は高さ4.5cm、径4.1cm、中央部の上・下半球体を結合させる突帯の径4.4cmを計測できる1箇がある。また頂部で円形座金と接続する経座状突起は高さ1cm、横巾は長径0.5cm、短径0.2cmの断面長方形をなすもので先端は山形にやや尖っている。頂点より約0.4cmに中心をもつ径0.2cmの穿孔がある。鈴下半球を横位に両端が円形で、それを結ぶ細い透窓が穿たれている。円形座金は、直径3.7cm、厚さ0.3cmの円盤で、円周縁内側にしのぎを有し、縁は鋭角で終わっている。裏面は、表面のしのぎ部分より縁に向かってやや外曲りに折れて縁に至る断面を有している。

円の中心には、鈴の突起部を挿入する長方形の穿孔がある。これら6箇の座金のうち4箇は裏面に直接する織布があり、その上部に多方向からなる細い繊維の重り合いが残存している。この繊維はおそらく革と推定してよいだろう。

鈴と座金の接続部分において指摘されることは、座金を平面にした場合、鈴は直角に接続せず、ど



第10圖 馬具類実測図(その1)

ちらかに傾斜していることである。鈴が胸繫又は尻繫に装着されることから傾斜したものであろうか。

轡 2連銜式のもの3連銜式の2組があり、前者には素環の鏡板が付き、後者には金銅張扁円心葉形鏡板が付く。

2連銜式轡、鉄製で銜・鏡板・引手を有するが、欠損している部分が多い。銜は中央のくくみを含めて長さ13cmの2連式であり、直径1cmの鉄棒で作られている。その両端は素環の鏡板と引手とを環で組合せている。鏡板は、直径0.8cmの鉄棒を曲げて長径9.3cm、短径7.4cmの楕円形素環に巾4.2cm、高さ1.8cmの立開を付けている。

引手は、直径1cmの鉄棒を12~14cmで引手壺を作り、片方を銜と連結している。引手壺は、鉄棒を丸く曲げて外反りさせてある。

3連銜式轡、銜はすべて鉄製の鍛造によるものである。中央の銜は、全長6cmで両端の連結環までの長さは2.3cmある。直径0.6cmの鉄棒は、両連結環を外径2cmに作り、太さを急速に減じて0.25cmに細め連結環を形成する鉄棒に各片側より約5周巻込んだものである。しかし、巻込みの終端を見つけ出すことは出来なかった。

この中央銜の連結環に直角に交わる両側の銜も中央銜と同様な造り方をしている。挿図11の左側銜は連結部を直径0.6cmの鉄棒を外径約2cmに丸く曲げ、太さを0.25~0.3cmに細めた鉄線を引手取付壺の方向へ3.5cmの長さに12周巻込んで終わっている。それより引手取付壺があるが、壺は板状に造られ壺と銜との境界に相対して約0.5cmの刺状突起が造り出されている。これは鏡板が銜内に移行することを防止するためのものである。右側銜も左側と同様な手法が用いられ、連結環からつながる鉄線は14周巻込まれている。

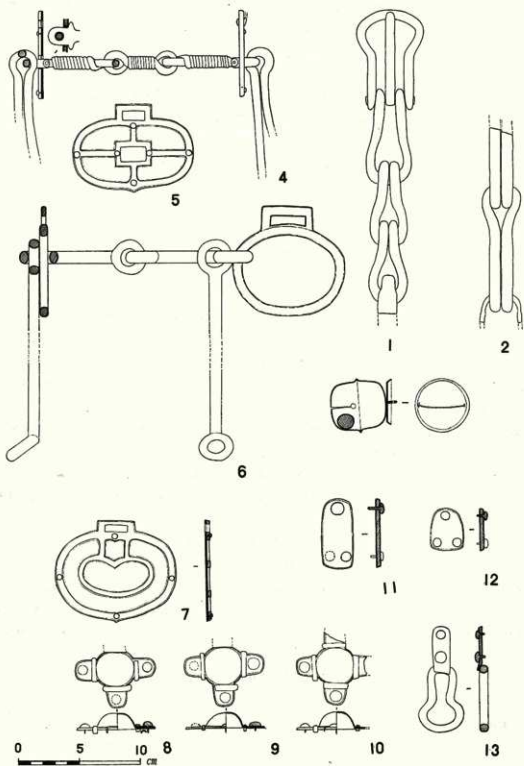
鏡板 鉄地金銅張十字文浮出しの文様構成で扁円形と心葉形の間形を呈するもので、轡の両側に付く2枚1組がある。構造は鉄台の上に文様構成と同一の鉄芯を用い、その上部を全面金銅張して文様を浮出し鋳留する手法である。大きさは横径9.88cm、縦径6.02cm、厚さ0.4cmのもので、中央上部に高さ1.2cm、巾3cmの立開が付く。文様構成は、鏡板の周辺部を1周する巾0.5cmの縁と中央部は銜に挿入する長方形の透窓の4辺を巾0.4cmの縁がめぐり周辺の縁から中心部透窓に4分割する十字文帯がある。この縁帯には十字文と接続する部分に各1本の紙が留められ透窓縁帯の短径中央部に各1本の紙があり合計6本の紙が鉄台に打留められている。

杏葉 鉄地金銅張心葉文透心葉形を呈し、3箇体とも同形品である。構造は、鉄台（厚さ0.2cm）の上に文様構成と同一の鉄芯（0.4cm）をのせ、その上部を金銅板を覆って鋳留したものである。横径9.9cm、縦径7.5cmで中央上部に高さ1cm、巾3.1cmの立開が付いている。周辺部を1周する巾0.5cmの縁が打出され、中心より上・下・左・右に各1本の紙がある。中央に横径6.2cm、縦3cmの扁平な打出心葉文が立開の両辺直下より並行する2条の巾0.5cmの打出文に接続する文様構成である。

立開は、革を接続する断面U字形の金具が装着されており、縦に2本の紙が打たれている。

辻金具 鉄地金銅張四脚式のもの3箇がある。辻の中央部は高さ1.3~1.5cm、直径約3cm、厚さ0.15cmの半球体があり、脚が四方に広がっている。脚は長さ1.7cm、巾1.8cm、厚さ0.15cmで1本の紙があり、半球体と脚の接続部分に鉄地銀張の巾0.3~0.5cmの貢金具があって、それに脚が挿入している。

雲珠 鉄地金銅張の雲珠残欠3点があるがその大きさ、脚の数等は不明である。



第11図 馬具類実測図 (その2)

紙留金具 鉄製の大・小2点がある。長さ5.5cm、巾2.4cm、厚さ0.2cmの細長いもので3箇の紙が打たれているものと、長さ3.3cm、巾2.6cm、厚さ0.2cmのもので3箇の紙が打たれたものがある。

鉸具 鉄製のもの3箇体がある。いずれも舌がなく2本の紙を打った留金具が装着したものである。(山村)

4. 武器類

Ⅰ章で触れたように、本墳では出土状態の明確でない副葬品が多い。武器類もその例外ではないが、中でも節大刀は棺内出土らしいことが伝えられるだけで、詳細を知り得ないのは残念である。他の武器類は、おおむね棺外東側に置かれていたものであることが判明している。

いま、武器類を整理分類すると次のとおりである。

節大刀(金具共)	3口分
素大刀身	1口
鉦(石突共)	1口
刀子	5口
鉄鏃	229本分
不明金具	4本

節 大 刀 (図版第15・16・第12図-1~10)

節大刀は発見当時、幾人かで分け合うために分割してしまったということであり、その後、掛川市教育委員会の努力で回収されたのが、ここに示したものである。大分足りない部分があるが、すでに行方が判らなくなってしまったのは残念でならない。

いま、現存する破片を相互に比較検討すると、次表のように少なくとも3口分にまとめることができる。括弧内の数字は第12図中の番号である。

	柄 頭	柄 間	鐔	鞘
節 大 刀 1	環 頭 式 (1)	蛇腹銀線巻 (2)	銀刃鍔出鐔 (7)	竜体銀荘 (3)
節 大 刀 2	円 頭 式 (4)	?	鉄 製 (5)	金 銅 荘 (6)
節 大 刀 3	?	蛇腹銀線巻 (7)	金 銅 製 (7)	?

節大刀1(第12図-1~3)

柄頭は、単竜式の環頭で、もちろん金銅製であるが、環状の竜体には鱗まで表現する精巧な作りものである。環状部は長径5.83cm、短径3.96cm、内長径4.26cmで、長さ2.5cmほどの茎がつく。

茎部には、木質が遺存しているが、木口を見せないようにするためか、金の薄板を被せてあり、これをしめるために、巾7.8mmの銅薄板金貼の責を使用している。ここには菱形文を連ねて両辺に刻みを入れた文様が刻まれている。

金銅の責につづいて、長さ2.63cm、巾3.26cmの銀製金具がつく。これは、厚さ0.25mmの銀薄板をまわしたもので、面取りがあるために、断面は8角形を呈する。また上下両端をわずかに折返している

点も注意しておこう。断面でみると、最大巾1.85cm、長径3.37cmである。

柄間部分(2)は断片であるが、断面が八角形を呈する点で、同一個体と判定したものである。巾1.2mmの細刻を刻んだ銀線を蛇腹状に巻いたもので、現存部長さ4.2cm、巾3cm、厚さ1.7cmである。

鐔の部分は、詳細不明だが、銅芯銀貼の噴出鏢らしい破片(8)と金銅製の鉤破片(9)がある。

刀身の部分(3)も、破損が著しい。現存長44cm、外荘の巾3.2cm、厚さ2cm、刀身は、双巾2.7cm、重ね0.9cm(厚すぎる感あり)である。刀身と同一個体らしい破片(3右)でみると、双巾2.6cm、重ね0.75cmである。外荘はなかなか立派な作りをしてある。銀の薄板に鱗状の打出しを施して、木質の鞘を包み、この銀板に巾1.5cm、厚さ0.6mmの金銅板を当て、紙止めにしたものである。金銅板にはハート形の透しを入れ、両辺には細線を2条づつ刻んである。なお、この外荘も、断面が八角形を呈する点も注意しておこう。

飾大刀2(第12図-4~6)

銀薄板製の円頭柄頭(4)がある。長さ7.48cm、最大巾4.34cm、厚さ2.43cm。2板の銀板を重ねたものであるが、重ねの部分に襷をめぐらす。柄元に寄せて径1.25cmの懸通孔をあける。

この柄頭を着装した大刀として、金銅製の大刀身を組み合わせてみた。現存長43.3cmの鐔部分を含む部位(5)と、現存長29.5cmの切先を含む部分(6)とがある。

鐔は、鉄製噴出で長径5.8cm、短径4.85cm、厚さ0.65cmである。基部は鏢から6.3cmあり、目釘孔を3個所に穿つ。刀身は、双巾3.1cm、重ね0.9cmで、木鞘に収められ、鞘口には、巾3.8cmの金銅製足金具がはめられている。これと8.5cmの間隔を置いて、巾3.3cm、長径3.95cm、短径3.3cmの金銅製實金具がはまる。鞘口の足金具と次の實金具の間、および實金具から7.2cmまでの範囲には、獣皮を思わせる黒味を帯びた皮膜が認められる。

切先を含む部分(6)では、外荘として、金銅薄板が剥落部が多いとはいえ、全面に認められる。

飾大刀3(第12図-7)

柄頭は欠失して不明である。柄間は木質の一方を彎入させて、巾1.8mmの細刻を入れた銀線を用い、密に巻上げている。

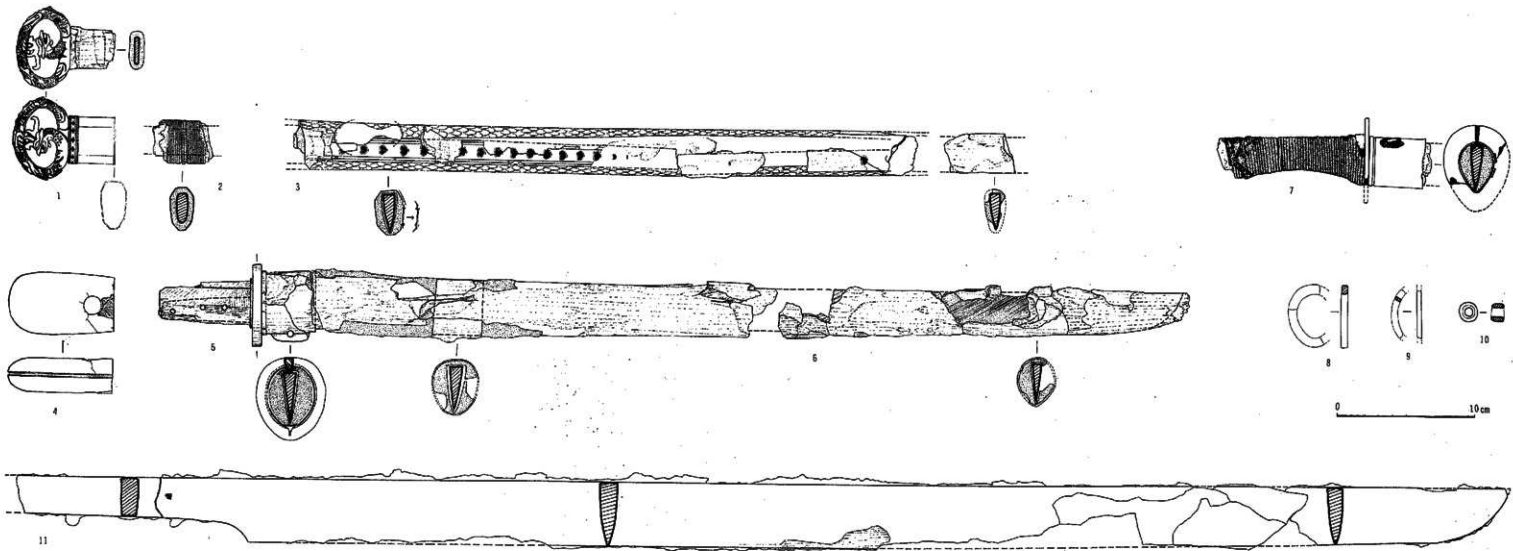
鐔は金銅製で一部が欠失している。推定長径6.1cm、推定短径4.9cm、厚さ3mm。鞘口の金具も金銅製で長径3.61cm、短径2.68cm、厚さ2.6mm。鞘部分は、鞘口に近い部分しか残っていないが、ここに巾3.6cm、断面長径3.55cm、同短径2.65cmの金銅製實金具がついている。この金具には図の裏面側(佩裏)に、方形の突起部を作り3孔を穿ってある。

以上で現存長15.5cmと、わずかしが残存しないが、この大刀は作りがなかなか精巧である。なお、鞘口、柄元、柄頭に近い部分などに、布と紐の一部が遺存している。この大刀が布製の袋に収められて、紐で閉じてあったことを示しているようである。

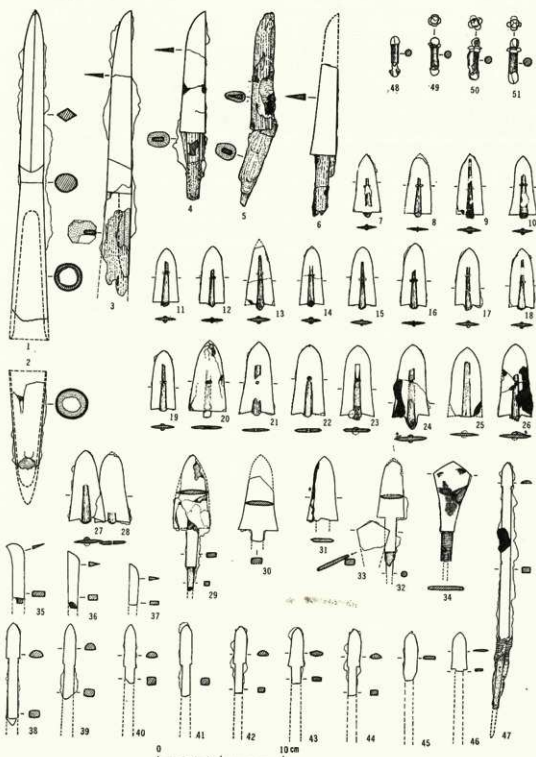
素大刀身(第12図-11)

飾大刀に対して、外荘のない裸のものを、素大刀身と称して区別してみたのである。ほぼ完存する大刀身が1口ある。

現存全長105.6cm、刀身部長さ89.3cm、関部巾4.4cm、重ね1.3cm、基部長さ16.3cm、巾2.8cmの比較



第12图 大刀 柄 夹 插 网



第13圖 武器類 夾 測 圖

的大きな平槌、平造の大刀である。

鐙 (図版第15B・第13図-1・2)

袋部に欠損があって、現長24.7cmの鐙身と、上下両端が折損して現長7.1cmの石突とがある。両者組み合さって1口分とする。

鐙身の穂先は両面に鐙があって、巾1.5~1.9cm、厚1~1.5cmの断面菱形をなす。

身・石突共に袋部に木質が残存している。

刀 子 (図版第15B・第13図-3~6)

5本あり、内4本を図示する。3が最大例で、身の全長21.3cm、刃部14.5cm、関部双巾2cm、重ね3.5mm。柄の木質が遺存し、面取して断面八角を呈するのは注目される。柄部の長さ現存8.2cm、巾2.2cm、厚さ1.75cmである。4は全長15.1cm、刃部9.7cm、関部双巾2cm、重ね4mm、基部に木質をわずかに残す。5は折れ曲ったままさびで固着しているが、全長15.6cm(木質部分も含めて)と復原できる。刃部9.5cm、双巾1.2cm、重ね3.5mmである。柄の木質が遺存するばかりでなく、木製鞘に収められたままだったことが、木質の遺存状態で判る。さらに鞘の表面に布片が付着しているのも注意しておこう。6は現存長12.1cm、関部双巾2.1cm、重ね5mmで、切先を欠失する。基部にはわずかに木質が遺存する。

残りの1例は、細片である。なお刀子が武器であるか否かという点は、ここでは問わないで、利器であることをもってここに含めたのである。

鉄 鏃 (図版第17・第13図-7~47)

図示した鉄鏃以外は、すべて尖根式であるから、これを分類すると、次のとおりである。

A類…短茎平根式 26本

B類…篋被平根式 4本

C類…有茎変形斧箭式 2本

D類…篋被尖根式 193本

A類(7~28)

無茎式のようにも見えるが、3~5mmの短かい基部を有するようである。長軸両面に篋を遺存している。その遺存状態を詳細に検討すると、穂の中央部にあけられた単孔もしくは双孔に、糸を貫ぬいて穂を狭む篋を、表裏で緊縛固定したものであることが判る。

本類は、いずれもよく似た形状を呈するが、全長が、4.7~5cm(最大巾2~2.3cm)のもの(7~19)と、5.7cm~6.7cm(最大巾2.7~3cm)のもの(20~28)と、大きさの点で二つに細別される。この区別は、別の点でも意味がある。前者では、穂にあけられた孔が二つであるが、後者では1孔であるし、前者には「ふくら」のこけたもの(9・13)を含むが、後者にはそれがない。そこで前者をA₁類とし、後者をA₂類とすれば、

A₁類……小形短茎平根双孔式 10本

A₂類……大形短茎平根単孔式 16本

ということになるのである。

なお、24と26には布の付着が認められる。

B 類 (29~32)

全長のわかるものがないので、穂先で示すと、29は長さ5.8cm、最大巾2.9cm、31は長さ5.2cm、最大巾2.4cm、30は全長不明で最大巾3.1cmである。32は推定長4.9cm、最大巾2.4cmである。大小の差で細別できそうだが、例類が少ないので別けない。

なお、31は図の左辺に布が付着している。

C 類 (33・34)

平造の相似た型式のものが2例ある。一方はB類の鉄鏃に付着して、穂の先端だけを残している。34は穂先の長さ5.6cm、巾2.9cm、33は巾2.8cmである。34には布の付着を認める。

D 類 (35~47)

量の多い割に全長の判る例がない。47は篋被ぎを含めて穂先が14cmである。これが、D類を代表するとみてよい。

穂先の型式は、ほとんどが、38~40のような片丸造三角形式のものであるが、36・37のような片刃箭式のもの3例、35のようなその変形とみるべきものが1例、含まれており、また、43・44のように鑄造らしいものもある。鉄鏃の内、D類は素大刀と共に棺外の東側に取められていたが、A~C類は出土状態が明らかでない。ただ、これらの中には、布の付着する例があって、A~C類として一括されていたことは推定されよう。

不明金具 (図版第15B)

花形付両頭鉄と仮称する。全長が48で3.3cm、49で3.1cm、50で3.4cm、51で3.6cm、径5~6mmの鉄製短棒の両端を円めて、4弁の花形をつけたものである。花形と花形の間に、1.5cmにわたり木質(軸に直交する)を遺存する。

この種の遺物については、大刀の目釘もしくは柄頭を固定する鉄と見る向きもあるが、大刀にそれを証する状態で着装された例を知らない。出土地点が確認されている発掘例でみると、鉄鏃のような武器類に共伴する場合があることから、楯か鞆にとりつけた金具とみられる。木質部の厚さ(1.5cm)からみて、楯の金具と推定しておく。^(註)

(向坂)

(註) この部分については、川江秀孝君の助言があったことを感謝する。

Ⅳ 考 察

1. 鏡 について

本鏡は、図文の構成からみて鏡式として、いかなるものに属するかの分類がむずかしいが、仿製の変形半円方格帯神獸鏡又は、変形神獸鏡に分類されるべきであろう。ここでは広義に、変形神獸鏡の名称を用いることにした。

本鏡を仿製鏡とすることに異論はないと信ずるが、他にあまり類例の少ない図文の構成をもっているのも、いかなる鏡式の鏡を手本として仿製されているのか、原鏡について若干の所見を加えておきたい。

手本になった鏡式としては、二つの場合が考えられる。

第Ⅰに「半円方格帯神獸鏡」を模写した仿製鏡ではなかろうかとする考え方である。

半円方格帯神獸鏡の主図文が、神像の両側に、禽形と獸形を配する構成をとるものであり、図形の構成に共通するものをもっている。

この鏡式には、著名な紀年鏡が多くみられるが、いずれも有翼の神像の座像が表現されている点、禽形、獸形の表現及び配置に大きな相違がある点、さらに、画文帯がめぐらされている点などを考慮した場合、安易に、半円方格帯神獸鏡の仿製とは断じ難い。

次に本鏡の図形が近似する鏡式に、「画文帯神獸鏡」に属する、「四仏四獸鏡」をあげられる。この鏡式は出土例も少なく、かなり飛躍している感をまねがれないが、四仏四獸鏡は、長野県飯田市御猿堂古墳(信濃史料刊行会1956・藤森1966)、岡山県都窪郡庄村出土、千葉県木更津市祇園出土(水野・小林1959・後藤1926)の同型鏡が知られている。

長野県、御猿堂古墳出土の四仏四獸鏡にみられる図形は、内区を乳によって四分し、この乳をめぐって、竜形、虎形が配され、円光をもった仏像の座像と立像が脇侍とともに、半肉形で表現されている。内区外周に半円方格帯をめぐらし、画文帯の平縁に終っている。

これを本鏡と比較すると、実に共通するものが多い。具体的な共通点を列挙すれば、Ⅰ、獸形、鳥禽形が乳をめぐる形に配置されている。Ⅱ、四仏鏡の竜形に相当する像が本鏡では禽形のような形態に表現されているが、竜形の表現が拙劣のため禽形に見えるのかも知れない。Ⅲ、四仏鏡の仏像の袈衣の表現が本鏡の人物像と共通している。さらに強いて共通点を求めるならば、本鏡の人物像の頭部にみられる弧状の飾は円光に相当するものであるとも考えられる。以上のように図文細部に互る表現の共通性もさることながら、鏡背の図文全体の構成が全く同類であり、これを偶然と認めることはできない。

以上の様な諸点から、本鏡は、第Ⅰの半円方格帯神獸鏡よりも後述の四仏四獸鏡により近似している。結論的に言えば、四仏四獸鏡を手本にして、図文をかなり正確に写しながら、しかも簡略化して新たに線彫の鋳型が作られたものと推察される。

なお、前記の四仏四獸鏡の仿製鏡として、千葉県木更津市沖出土鏡(増田1966)、ベルリン民族博物館蔵(増田1966)の二面が知られている。しかしこの二面は前記の四仏四獸鏡を「踏み返し」た仿

製鏡であるとされており、(増田1966)本鏡とは全く異なる仿製鏡である。仿製鏡の製作上の手法の相違を示す好例としてあげられよう。

次に本鏡に類似する鏡の出土例として、次の様なものがある。(四仏四獸鏡の仿製という意味ではない)

1. 群馬県群馬郡八幡大字若田(旧地名)出土の変形神獸鏡 1面
2. 奈良県北葛城郡馬見村大字足相(旧地名)変形神獸鏡 1面
3. 福岡県嘉穂郡桂川町寿命王塚出土変形神獸鏡

以上挙げた3例についてみれば、次の共通点を見出すことができる。

- I 図文の構成
- A 簡略化された神像と獸形を基本図形としている。
 - B 獸形の図文の表現が、環状をなし、乳をめぐって配置されている。
 - C 半円方格帯が加えられている。
- II 図文の表現手法 図文の表現手法が、半肉彫でなく、神像、獸形ともに、刻線で表現されている。

この共通点から仿製の原因について推考すれば、半円方格帯神獸鏡が原鏡として最も近似しているが、さらに広義に、平縁式神獸鏡系の仿製鏡と考えたい。図文の構成に問題があるが、表現手法を重視して類例を求めればかなり多くあり、仿製鏡の一類型をなしている。

本鏡を含めて、これら一群の仿製鏡の年代について考えてみたい。

仿製鏡の鑄造年代については、古くから先学のすぐれた業績があるが、これらの成果をもとにして考えれば、概略次の様に大別される。

仿製第I期 魏の三角縁神獸鏡を中心とした原鏡を正確に模写した5世紀前半以前

仿製第II期 主に後漢の鏡式を仿製し、原鏡を忠実に模写する一方で、別の鏡式の図文を加えるが、精巧な鏡。隅田八幡画像鏡に代表される5世紀後半

仿製第III期 1. 原鏡としては、平縁神獸鏡系、獸形鏡などを推定させるが、図文は本来の意味を失い、簡略化し、刻線で表現され小型化してくる。

2. 一方では、新たに鈴鏡が製作され始める6世紀前半

前記の変形神獸鏡群は、仿製第III期に属するものであり、鑄造年代を6世紀前半と考える。

変形神獸鏡群のうち、出土古墳の調査されたのは、寿命王塚古墳と(梅原・小林1940)本墳だけであるが、寿命王塚古墳の築造年代は6世紀中葉とされており(小林1965)鑄造年代と矛盾しない。本墳の築造年代も6世紀中葉を降ることは考えられず、多くの資料は、6世紀前半と考えることを支持している。

(平野)

2. 玉類について

前章で記述したように、本墳から出土した装身具類は、種類も量的にも乏しいが、当初から副葬されなかったものか、或いは、本横穴が発見され、調査に至るまでの経過のなかで人為的な攪乱があり、この時失われたものか不明であるが、攪乱による破壊が多かったものと推察される。

量的には乏しいが、質的には、銀製空玉類や類トンボ玉など、特異な遺物が出土しており注目される。

トンボ玉の出現は、古墳時代後期の特色としてとりあげられているが、(三木・小林1959) 普遍的に出土する紫紺色のガラス丸玉と異なり、出土例がきわめて少ない。

香川県鎌子塚古墳より出土したトンボ玉は有名である。(三木・小林1959)

他に、横穴墳より出土した例として、宮城県遠田郡迫戸横穴より出土のトンボ玉が報告されている(氏家1964)。

県内の古墳よりトンボ玉の出土したのは、袋井大門大塚古墳がある。

トンボ玉とは異なるが、手法的に同類のガラスを熔着させ稿文様を作る雁木玉が愛知県岡崎市岩津2号墳より^(註)出土している(岡崎市教委1964)。

トンボ玉の出土例の少ないのは、従来あまり重要視されず簡単にガラス玉として一括されて報告されている例もある。

銀製空玉及び金銅製の空玉の出土例は、次表に表示したようにかなり多くの出土例が報告されている。

副葬品に、銀製及び金銅製の空玉を含む古墳の副葬品には、共通したタイプが認められる。例えば、代表的出土例をあげれば、表示したなかで、愛媛県東宮山古墳、兵庫県西宮山古墳、奈良県珠城山古墳、埼玉県將軍塚古墳などにみられる如く、Ⅰ 鏡(仿製鏡)、Ⅱ 金、銀、金銅製品を含む豊富な服飾装身具類、Ⅲ 銀、金銅製大刀、桂甲、衝角付兜、馬具類などの武器、武具が組合されている例が多い。

ここでは、特に銀製空玉及び金銅製空玉に伴出している、服飾装身具についてみれば、金銅製冠が東宮山、西宮山古墳より出土しており、銀製帯金具が石川県狐山古墳、金銅製帯金具が千葉県九条塚古墳より出土している。また、金製耳飾が福岡県日拝塚、西宮山古墳より出土し、金製勾玉、平玉が將軍塚古墳より出土している。上記のように空玉と伴出する服飾装身具類は豪華なものが多く、またガラス玉、その他玉類の種類も多く、量も豊富に出土している。服飾装身具だけをとりあげても、これらの副葬品をもつ古墳の性格がうかがえる。

県内では、袋井市大門大塚古墳、賤機山古墳より銀空玉が出土し、類トンボ玉が大門大塚より出土している。この両者は、群集墳をなさず独立した位置を占め、内部構造も横穴式石室を内部主体とし、副葬品も金銅製品を含め群を抜き後期古墳のなかで特別の位置を占めている。築造年代は6世紀前半を考えたい。(平野)

(註)

金銅製空玉の場合も薄い板をプレスして膠着する手法は、全く変わらないため銀製空玉と同様に扱いたい。

3. 土器類の編年の位置について

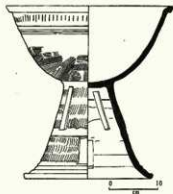
後期古墳の年代序列を編年する上において普遍的に検出される須恵器を以って一応序列編年されるのが通例である。そのため各地において須恵器の編年研究が盛んに進められ、成果を上げているのは周知の通りである。

遠江においても變度が編年が試みられ、古窯跡出土の須恵器の編年(山村他1966)を以ってその位置を確立し、現在古墳出土の須恵器の編年が試みられている。この成果をもとに宇洞ヶ谷横穴墳出土の須恵器の編年の位置づけを試みた場合、器形を2分することが可能であって、まず第4章3節で述べた第1類に属する須恵器は器高16cm以上を有する無蓋高杯、器高24cm以上を有する有蓋高杯を主体とするグループで、特微的には脚を有する器種にそれぞれ手工されている脚中段において2条の沈線によって上下を区分し、上下2段に細長透窓を穿がつ手法で、遠江においては磐田市飯塚古墳、袋井市大門大塚古墳にほど近い時期を与えることが出来る。このことは関西における南塚式(横山1959)にその類例を求めることが可能である。

器台について若干触れると、遠江において器台出土は前述の磐田飯塚古墳、袋井市大門大塚古墳(第14図)と他1例をあげることが出来る。その内大門大塚古墳出土の器台は退化しながらも上下二段千鳥透しを穿がつ手法は水尾式(横山1959)に求めることが可能と思われるが、宇洞ヶ谷横穴墳の器台は小形化した高杯形の形状を呈するもので、透窓の手法において千鳥透しのすたれた次の時期にその製作を求めるものとされよう。

第2類に属する須恵器は調査中土器(第9 図48、49)と共に支門附近において検出されたグループであって、前述第1類須恵器が奥壁附近の出土と考えられるところからしても、両者間には時間的差が認められよう。器形の特微として杯身の口径12cm~13cmを示す数値と、口唇内側に僅かに沈線手法を留めているもの、また無蓋高杯は前時期のそれが透窓によって装飾されていたものがなくなり、脚が短かく、脚端が外に広がりを有するものとなる。遠江においてこの時期は、横穴式石室、横穴墳が全般的に定着したことを示すが如く顕著に検出される時期である。このことは島田市水掛渡古墳群(山村他1965)、同谷口原古墳群(山村1965)、藤枝市瀬戸古墳群(増井他1968)、菊川町下本所横穴古墳群(内藤・藤田1968)、掛川市本村A、B横穴古墳群(向坂、平野1966)、同岡津A、B横穴古墳群(平野他1968)に代表されるものであって、関西における海北塚式(横山1959)に類例を求めることが可能である。

須恵器のみを以ってその編年の考察を試みた場合、第1類に属するグループを南塚式に類例を求めると6世紀前半にその年代を求め須恵器第Ⅲ期前葉に編年の位置が求められ、第2類に属するグループが海北塚式に類例を求めると6世紀後半にその年代を求め、須恵器第Ⅲ期中葉に編年の位置を求めるものである。(大谷)



第14図 袋井市大門大塚古墳出土器台

4. 馬具類について

本墳出土の馬具は他の副葬品と同様、発見の際における遺物の取扱いが第3者によるもので、鞍橋の一部を除いてその出土地点・配列状態の所見を得たものでない。また資料は錆化・腐朽化したものを除き、欠損状態から副葬の際の全品が遺存しているとは思われない。現存する馬具を一覧すると、鞍橋2背・鍔2具・轡2具・杏葉3箇・馬鈴6箇・雲珠1箇・辻金具3箇・鍔留金具若干数があり、馬具としてはかなり充実した組合せを有している。

これら各種類の装具のなかに同種で形式の差違を認めるものと、同種で同類のものがある。なかでも顕著な差は轡が示しており、第1例に鉄地金銅張扁円・心葉形鏡板に十字文を浮出し手法で表わし、鍛造の3連式銜と2条線式引手を組合せた轡一式である。第2例は扁円素環の鏡板に2連式銜を組合せた極く一般的に見受ける轡一式である。

第1例の轡における鏡板はその製作手法を特に指摘しなければならない。鉄地の上に十字文を形どる鉄芯をのせ、さらに一枚からなる金銅板で全体を覆って鍔留し、十字文を浮出させる手法は、岡山県赤井古墳出土の杏葉で代表される国産品(小野山1959)と同類であり、本墳の場合、杏葉も文様構成は異なるもののその製作手法は全く共通したものである。しかし鏡板に組合さる3連式銜は、江田船山古墳出土の素環式轡一式が顕著な例で知られ、稀少的なものとしてされている。当例の銜も船山と同様それぞれの連結部の鉄材末端を線巻手法で飾った特殊技術が用いられている。3連式銜が漢型式の残存で、引手の2条線式のものも舶載品に多くの類例を見る(小野山1959)ことから、本墳の銜・引手もその要素を多分に有していることは指摘できよう。

鏡板の国産的要素と、銜・引手の舶載的要素との両者を、一連の製作順序と技術で組合せた当該する轡一式は、おそらく韓鍛冶のごとき(久永1966)手に成る製品と考えられ、岡山県赤井古墳の比定年代と同一類例であること、また古い残存形式を有する銜、あるいは当報告Ⅳ章5節(向坂)から指摘される諸点を考慮しその実年代を6世紀前半のなかに求めたい。そして第2例を、扁円で立開部が横長で低くなったことを新しい要素として、6世紀後半に実年代を比定したい。

次に同種、同類と考えられる鞍橋がある。鞍2背のうち第1例(第10図1)は海が木心漆地に金箔張をし、覆輪的な線飾金具をめぐらせた装飾鞍橋である。第2例は手法を同一としながら、鍔留金具の外には装飾した痕跡を見受けられないもので同類のなかにおける精粗の違いを示すものであろう。

鍔留の兵庫鎖とその変形鎖は、類別はともかくとして鍔留が両者とも木心塗鍔を取付けた金具を有している。

これら轡・鞍・鍔の三種が2組から成る騎乗用装具であることは言うまでもないが、うち1組は、3連式銜轡と装飾鞍・木心塗鍔・杏葉・雲珠・馬鈴等を組合せた遠江地方でも数少ない装飾馬具であり、これを有した被葬者は横穴墳の葬制を有する特殊性を含みながらも宇洞ヶ谷を中心とする広範な地域を統括し得た支配者階層であったことが推察できよう。(山村)

5. 飾大刀について

本項出土の武器類は、棺内副葬品としての飾大刀と、棺外に収められた実戦的な武器類とに大別できるが、ここでは特に飾大刀について若干論じてみようと思う。

ここで「飾大刀」と呼ぶのは、歴史時代の用語にならって(後藤1940)、これを古墳時代まで拡大解釈しようとしたからである。その場合、金鋼荘または銀荘の大刀類を飾大刀と総称することになるが、飾大刀の分類は、従来柄頭の型式に基づいていた。

まず、飾大刀はA環頭式、B円頭式、C圭頭式、D方頭式、E頭椎式とに大別される。さらに環頭式は、素環式をA0として、A1三葉環式、A2三繫環式、A3獅喙式、A4単鳳・単竜環式、A5双竜環式に細別される(後藤1936)。

次に、柄頭以外の拵をみると、資金具や足金物の他は木地のままになっている例がかなり多い。これは、漆塗や布巻・皮巻のような遺存しにくい材質だったため、木地だけになって見えるものを含んでいるだろう。これをa類庄としよう。他方金鋼荘や銀荘の例は、さまざまな変化があって、全国的な資料を集成する能力のないわれわれには、分類の断案を出せないのであるが、ほぼ次のように整理してみようと思う。

b類庄) 柄間・鞘ともに銀板で包み、これに鱗状文や渦文を打ち出しているもの。

c類庄) 銅板を金薄板で包む金具(金金環)と、銀線(刻みを斜交互に入れる)で柄部を巻き、鞘には金金具の資金具でしめるもの。(第15図1)

d類庄) 銀板を多用するもので、柄間に銀線(直交の刻みを入れる)を巻いて両端を銀板でしめるもの(第15図3)や、柄間に銀線を擬した線刻を入れるもの(第15図2)などがある。また、前者の例では柄頭のもとに巾の狭い金金具を巻いている。

e類庄) d類庄と類似するが、銀板を金鋼板にかえたものを包括する(第15図4)。ただ、実測図や写真だけでは、銀板か金鋼板かの区別がむずかしい。

b~e類庄では、鐔の有無が明確でなく、e類庄で喰出鐔の例が、多いらしいことを注意したい。また、これらの類では、佩裏を金鋼板(猪目あるいはハート形の透彫)で、鋏止めした例がままみられる。

f類庄) 柄・鞘ともに金鋼板で包み、円文を打ち出して、足金物をつけるもの。(第15図5~7)

g類庄) f類庄と基本的には同じだが、柄間の表裏や鞘の佩裏に連続渦文を刻み、金鋼製有透鐔を膺荘するなどの点に若干相異がある。

b~e類庄には足金物がつかないが、資金具の佩裏に突出部を作り出したり、遊環をつけた金具を挿入したりして、佩用の便としたらしい。

以上、拵をa~g類の7類型に分類してみたが、もちろんこれで、すべての飾大刀を包括しきれなかろうか問題もあろうし、実際には柄頭が遊離して、拵全体の不明なものが、非常に多いことも考慮されねばならない。そうしたことを充分承知の上で、敢えて柄頭と拵との関係を次のように整理してみた。

A環頭式	{	1	三葉環式……………	b類荘
		2	三繫環式……………	b・e類荘
		3	獅吻式……………	e類荘
		4	単竜(鳳)環式…………	d～f類荘
		5	双竜環式……………	c～f類荘
B円頭式…………… e類荘				
C圭頭式…………… e・f類荘				
D方頭式…………… a・e類荘				
E頭椎式…………… g類荘				

さて、この分類に本墳出土の飾大刀を照らしてみると、1はA4-d類荘、2はB-e類荘、3は柄頭不明でe類荘らしい。では、飾大刀全体の中で、これはいかなる位置を占めているかを知るために、まず手近かなところで静岡県内の飾大刀を遥観すると、管見による限り次の40古墳、47例を数え^(註1)る。これには、金鋼荘の大刀残片だけが出土し、柄頭の欠失している例をほとんど加えていないから、飾大刀としての例数はまだ増えるはずである。

この表によって、三繫環式(A2)2例、獅吻式(A3)4例、単竜(鳳)環式(A4)5例、双竜環式(A5)8例、円頭式(B)3例、圭頭式(C)6例、方頭式(D)3例、頭椎式(E)15例が含まれ、これらの分布をみると、一般的にいて旧駿河国に出土例が多いことが判る。

次に、これらを出土した古墳は、それぞれの地域の後期群集墳として、最も普遍的な小形の円墳もしくは、横穴墳である点を注目したい。当然、円墳の場合は横穴式石室を内部主体とすることになるわけだ。

そして、これらの飾大刀そのものの年代観についてであるが、これは、静岡県内の資料だけでは判断がむずかしい。三繫環式2例の内、合代島古墳例は、今日出土古墳と目される付近の合代島に行ってみると、割石積の石室が遺存しており、後期の比較的古い年代と考えられる。大ケ谷横穴墳の須恵器は第Ⅲ期中葉のものである。したがって、県内2例についてみる限り、6世紀中葉を下らないとしなければならぬ。2例共通江出土である点を注意しておこう。

獅吻式は、多少の大小差はあっても、作りはいずれもよく似ていて、製作年代も限定されるように思えるが、院内1号墳では第Ⅲ期後半頃の須恵器を伴っている。千葉県金鈴塚古墳(早大1952)では3例出土しており、いずれもD区と称する石棺と奥壁の間から出ているらしい。この部分は第1次埋葬に続く追葬の結果が雑然としている部分で、年代は決めかねるようだが、金鈴塚古墳では最も古い須恵器が、第Ⅲ期中葉であるから、この獅吻式は、それ以前とはいえない。かといって、A区やB区のような最後の埋葬に際しての副葬品ではなさそうである。6世紀末頃とみてよいのではなからうか。

円頭式は、宇洞ヶ谷例が比較的年代が決め易いとはいえ、本墳に追葬が推定される以上須恵器第2類(第Ⅲ期後葉)との関連性を考えねばならない。大刀自身についてみれば、金鋼荘で拵が大きい点や鞘口金具に、足金物に類する円孔を穿つ点など、朝鮮製のものととは大分異なるようである。しかし、柄頭が銀製であることや、柄間に金銅板を巻かない点は、なお古式を留めるようである。したがって、6世紀代とし、7世紀代には下らないとしておこう。

主頭式は、岡津B6号墳（横穴）において、第Ⅲ期後葉と第Ⅳ期前葉の須恵器のいずれかに伴出したわけだが、出土状態からみて、後者に伴ったとすべきであろう。神明4号墳でも同様であり、新芝古墳例では竊嚙式と伴出し、土葬長塚古墳では後に述べる透形の双竜環式に伴っている。千葉県金鈴塚古墳例（早大1952）でも、石棺の中から頭椎大刀に伴出している。以上のことから、この種の大刀は、7世紀前半代に中心をおくと推定できそうである。

方頭式は、高崎古墳Bにおいて、8世紀前葉の土器群に伴出し、浅間坂上2号墳や大阪上古墳でも同じく新しい須恵器と共に発掘されている。

頭椎式については、後藤守一の詳細な研究があるが（後藤1936）、持全体からみた柄頭の相対的大小差・柄間の作りなどからさらに細別可能である。伴出須恵器からみても、7世紀代に盛行した型式であることが知られる。

以上の諸型式は、盛行年代が比較的短かかったと推定されるが、これらに対して、竜（鳳）体を表現した型式は、使用年代がかなり長かつたらしい。それはこの類型が多くの細別型式を含むことから推測されるし、実際に後期でも古い古墳から、新しい古墳まで副葬例がみられる。

梅原末治は、滋賀県稲荷山古墳の報告（浜田・梅原1922）に際して、環頭式の刀剣類を全国的に集成し、竜（鳳）体のものだけで21型式に細別した。これに教えられて、若干の私見を加えながら、次のような類別をしてみた。

まず、竜（鳳）首・環状部ともに半肉彫あるいは丸彫として作るものをⅠ類、環状部は半肉彫だが、竜首は板状に便化しているものをⅡ類、竜体・環状部ともに板状透彫に作るものをⅢ類とする。さらにⅠ類は、環状部の径長が6cm以下のもので、彫が精巧のもの（ α 種）と、径長が8cm以上に大形化して、彫がやや便化しているもの（ β 種）とに区別できる。単竜（鳳）環式では、Ⅰ類（ $\alpha \cdot \beta$ 両種を含む）だけが知られており、Ⅱ・Ⅲ類は例がないらしい。双竜環式では、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類すべてを網羅するが、どうしたわけか、Ⅰ類 β 種の確実な例が見当たらない。なお、双竜環式では、竜首が絡み合ったり背中合せになったりする場合（X型）と、いわゆる争玉式になったりする場合（O型）とがあるが、Ⅰ類 α 種ではX型が多く、Ⅱ・Ⅲ類ではおしなべてO型をとる。

次に、拵をみると、Ⅰ類 α 種では、多くの場合c・d類拵となっており、Ⅰ類 β 種ではd・e類拵となる。Ⅱ類とⅢ類は、多くf類拵であるが、稀にe類拵となることもあるらしい。

宇洞谷横穴墳出土の単竜環式飾大刀（A4）は、上記の分類にうまくはまらない。それは柄頭がⅠ類 α 種の作りを示すからである。これとよく似た例は、千葉県山王山古墳例（大塚・甘粕1963）や、栃木県天王塚古墳例（早大1958）などにみる。前者は拵が似ているが、柄頭は β 種であり、後者は柄頭の作りが単鳳式とはいえず α 種であるが、拵はe類拵らしい。山王山古墳は6世紀前半と推定されているが、天王塚古墳は6世紀代とするだけで前半か後半か明らかでない。しかし、墳形や出土品の内容は、6世紀代でも前半には位置づけがむずかしいかも知れない。宇洞谷例は、山王山古墳例と同列もしくは、やや古いとすべきであろうから、6世紀前葉に位置づけ得るのではなかろうか。出土須恵器の内第Ⅰ類としたのが、第Ⅲ期前葉の型式であることから、この環頭大刀との結びつきを考えることができる。

ところで、前述のⅠ類 α 種の内、c類拵のものは、朝鮮に類例が多く、彼地からの舶載品であるこ

とは明らかである。福岡県(筑前)雷山例(浜山・梅原1922付載)と滋賀県稲荷山古墳例(浜田・梅原1922)は、数少ない船載品とみられる。これらの副葬年代は、^(註5)稲荷山古墳の年代(5~6世紀の交り)が示している。

次にI類ノ種は、単竜(鳳)環式の例しかないらしいが、年代的には千葉県山王山古墳例(d類荘)が古い時期を示しており、e類荘の沼津市東本郷3号墳例・静岡市清水山古墳例(推定)などは、やや年代が下降すると思われる。6世紀中葉というところであろうか。さらに富士市船津古墳例(第15図5)では、f類荘であり、すでに7世紀に下るとすべきである。

I類は、県内では院内2号墳例(第15図6)があり、瀬戸E9号墳例もそうらしい。県外では、千葉県金鈴塚出土の双竜環式の内、大きい方が好例である(早大1952)。これは、D区から出ており、B区から出た別の双竜環式(A5-I類)よりも、型的にも追跡順位からみても、古いとみられる。7世紀代としても比較的早く置いてもよいのではなかろうか。

II類のものは、県内にかなり類例がある。しかし、伴出関係から年代の推定できる資料はほとんどない。古く発見されたものばかりであるからだ。中でも年代推定の根拠としてよいのは、本堂横穴墳例(第15図7)であって、7世紀代も古いところへはいかないようである。千葉県金鈴塚古墳B区出土(新しい副葬)の例も、この年代より古くはならないはずである。

以上、竜(鳳)体作りの環頭大刀について、それぞれの類型の年代観と、本墳出土の節大刀の位置づけをした。そして、かなり不用意に実年代の比定を行なったが、それは各類型相互の関係を明確にしたいためであった。そこでこれを再度図表の形で示すと次のとおりである。

		5 C		6 C		7 C		8 C		
		後	前	中	後	前	中	後	前	
A 環 頭 式	1	三葉環式		(b) (県内に例なし)						
	2	三葉環式		(b)		(e)				
	3	獅喙式				(e)				
	4	単 電 式	I α種		(c・d)		(d)(e)			
		I β種			(d)		(e)			
5	双 電 式	I α種		(c)		?		(e) (f)		
		II種						(f)		
B	円頭式	(d)		?		(e)		(f)		
C	圭頭式					(e)		(f)		
D	方頭式							(e)		
E	頭椎式					(e)		(g)		

*点線内は朝鮮製を示す。

さて、こうした操作を経て、再び静岡県内の出土例をこの図表と対比してみると、第1に、ほぼ6世紀中葉を境にして、節大刀は朝鮮製の規範を外れて、全くの日本型となること、第2に、静岡県内の出土例は、そのほとんどが、6世紀後葉以降、7世紀中葉ころまでの古墳に副葬されたものと推定

されること、第3に、数少ない6世紀中葉以前の出土例は、旧遠江国にあり、駿河国にはまだ出土例がないこと、などの諸点が明らかとなるのである。そして、その6世紀中葉以前とされるのは、合代島古墳・大ヶ谷横穴墳出土の三繫環式大刀と、本墳出土の単竜環式銀狂大刀である。この環頭大刀は、国産とは思えないほどの精巧なものであるが、同様な形のもので、まだ朝鮮の出土例あるを知らない。したがって、これを朝鮮よりの舶載品とは断じかねるところである。この点は今後の類例をまつとしても、三繫環式と共に、朝鮮の制を色濃く表現する遺品というべきである。

前段の第1点、6世紀後半以降純国産の筋大刀が増加すること、第2点、静岡県内の出土例がほとんどその時期のものとして推定されることは、深く結びつく現象と思われる。そして、出土古墳が冒頭でみたとおり、後期群集墳のごく普遍的な小形円墳であるという事実とも結びつくはずである。途中の論証を省いて飛躍的に言えば、これらの筋大刀のあり方に示された現象は、古墳時代後期後半における、地方的下級官人層の形成過程を如実に反映しているというべきではなからうか。

そうした観点に立つ時、5～6世紀における各地の豪族層が、大和政権下の官僚層として組み込まれて行く過程を、冠と垂飾耳飾出土古墳に焦点を当てて論じた、堀田啓一の視点(堀田1967)が、一層明確になるのではないか。彼等が、中央に出仕し得た下級官僚とすれば、それを支える上記のような地方官人層の形成も不可欠であったに違いない。(向坂)

(註)

1. 堀垣甲子男氏によると庵原郡富士川町内で、双竜環式(A5-1)のものが出土しているとの事であり、増井義巳氏の藤枝市での調査でも、頭椎式のものが出ているようである。また、小笠原菊川町大淵ヶ谷横穴墳からも単竜式のものが発見され、したがって、50例をこすかも知れない。
2. 末永1943に示された図版第43(1)との対比。
3. 金鈴塚古墳では、A～E区に分けて副葬品を取り上げているが、埋葬の順位(1人づつとは限らない)は、D区→C区・A区→B区・E区となるらしい。
4. 例えば千葉県金鈴塚古墳(早大1952)の例でいえば、柄間が直で銀縁巻、柄頭が無鞋目式のものが古く、柄間が彎曲して文様を刻んだ金銅板で包み、柄頭が鞋目式のものが新しい。これは後藤1936Aですでに説いていることである。
5. 朝鮮製では、環状部の下端を金銀で包み込むのがひとつの特徴で、これに絡龍文を打ち出している。こういう作りのもので、埼玉県將軍塚古墳出土三葉環も、舶載品と認められる。

結 言

掛川市宇洞ヶ谷横穴墳は、構造的にも副葬品の内容においても、極めて特異な存在であった。その主な特徴を列記すると、

1. 全長8m余の大規模な横穴に、長大な二段作りの墓道を付設している。
2. 特殊な台形突起を彫込んだ巨大な石棺を造り付けにしている。
3. 飛禽走獸文絨半円方格帯神獸鏡類（特に四仏四獸鏡）を仿製した重厚な作りの鏡と銀製空玉・類トンボ玉を副葬していた。
4. 大量の須恵器を副葬していた。
5. 三連式二条線作りの引手をつけた金銅荘の轡に、鉄地金銅張の杏葉と鞍、木心壺鏡などを含む馬具類が副葬されていた。
6. 船載とも思えるような、単竜環頭式銀荘の飾大刀と金銅荘の飾大刀を副葬し、実戦用の武器も多く副えられていた。

そして、構造的には従来遠江地方で、6世紀中頃と推定されていた横穴墳（掛川市本村横穴墳A群など）と若干の共通点があり、より古いと解すべきであるから、6世紀中頃でもやや古い築造年代を与え得るのである。

鏡や玉類は、この年代と矛盾しないようであり、馬具の内、木心壺鏡と三連銜式轡、金銅荘鞍なども同列に置かれよう。環頭大刀も6世紀前半代という年代観を支持している。

ところが、須恵器・土師器には、二大別があり、古かるべき第1類は6世紀前半の型式をもつが、第2類は6世紀代としても後半の型式を示しているのである。そういえば、空玉の型式は新しく考えてもよいし、二連銜式轡も、その頃の入手と推定した方が妥当かも知れない。また、円頭大刀も新しい要素であろう。また出土状態からみても、追葬の可能性は高いのである。

しかして、本墳が掛川市高御所の横穴墳群集地帯を背にひかえて、大化前代の「素賀国」の本拠と目される、逆川の沖積地帯に近く立地している点は、見過すことのできぬ関心事である。しかも、横穴墳でありながら、ひとり群をはなれて独立墳として存在することや、副葬品や横穴墳の構造などにみる特殊性をかえりみると、われわれは、一大横穴群集墳の被葬者達やその一族を統率した人物を想定してみたい衝動にかられるのである。そうした視点については、遠江の横穴墳について、もう少し確かな資料を握ってから、検討しようと思うが、Ⅳ章4節においては、若干言及するところがあった。

本墳は、すでに地上から姿を消してしまったが、出土品は掛川市教育委員会に保存されており、その史的・工芸的価値が認められて、昭和43年3月19日付で、静岡県指定文化財（考古資料）となった。（大谷・平野・向坂・山村）

参 考 文 献

- 氏家典 1964: 「辺境における横穴古墳群の諸問題——陸前の場合——」『日本考古学の諸問題』
梅原木治・小林行雄: 『筑前高穂郡王家裝飾古墳』京都帝國大学文学部考古学研究報告第15冊
大場馨雄・甘粕健 1963: 『姉ヶ崎山王山古墳』(10月)
大谷純仁・山下晃 1968: 「掛川市岡津横穴墳B群発掘調査概報」『東名高速道路関係埋蔵文化財発
掘調査報告書』(6月)
岡崎市教育委員会 1964: 『岩津古墳群』
後藤守一 1926: 『漢式説』
後藤守一 1936A: 「原始時代の武器と武装」『考古学講座』(4月)
後藤守一 1936B: 「頭椎大刀に就て」『考古学雑誌』26-8・12(8月・12月)
後藤守一 1940: 『日本歴史考古学』(1月)
小林行雄 1931: 「家形石棺」『古代学研究』4・5(3月・7月)
小林行雄 1965: 『古鏡』
静岡県 1930: 『静岡県史』1
静岡県 1931: 『静岡県史』2
静岡県教育委員会 1961: 『静岡県遺跡地名表』(3月)
信濃史料刊行会 1956: 『信濃考古綜覧』下巻
末永雅雄 1943: 『日本上代の武器』(7月)
内藤晃・藤田等 1968: 「小笠郡菊川町下本所横穴古墳群調査概報」『東名高速道路関係埋蔵文化財
発掘調査報告書』(6月)
浜田耕作・梅原木治 1922: 『近江国高島郡水尾村鴨の古墳』(11月)
樋口清之 1937: 「静岡県小笠郡須賀家弥生式土器出土遺跡の研究」『史前学雑誌』9-3・4
尾藤 皖 1968: 「掛川市本村横穴墳A群発掘調査概報」『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報
告書』(6月)
平野和男・向坂綱二・大谷純仁 1964: 『掛川市城山横穴墳調査報告書』(7月)
平野和男・山村宏・大谷純仁 1965: 『地蔵ヶ谷古墳及び横穴』
平野和男・向坂綱二 1966: 『掛川市本村横穴群・本村古墳(第1号・第2号)発掘調査概報』
平野和男・寺田義昭 1968: 「掛川市岡津横穴墳A群発掘調査概報」『東名高速道路関係埋蔵文化財
発掘調査報告書』(6月)
藤森栄一 1966: 「古墳文化の地域的特色——中部高地」『日本の考古学』Ⅳ
堀田啓一 1967: 「冠・垂飾耳飾の出土した古墳と大和政権」『古代学研究』49(10月)
増田精一 1966: 「金屬工藝」『日本の考古学』Ⅴ
三木文雄・小林行雄 1959: 「伝統工藝と新興工藝」『世界考古学大系』日本Ⅱ
水野清一・小林行雄編 1959: 『図解考古学辞典』
宮本彦彦・植松章八 1968: 「掛川市本村横穴墳B群発掘調査概報」『東名高速道路関係埋蔵文化財
発掘調査報告書』(6月)
早稲田大学考古学研究室 1952: 『上総金鈴塚古墳』(11月)
早稲田大学考古学研究室 1958: 「栃木県芳賀郡天王塚古墳」『日本考古学年報』7(3月)

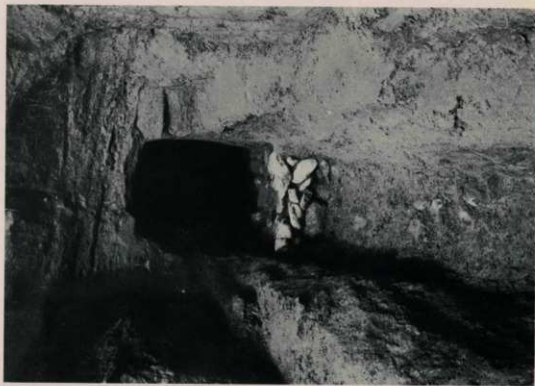
- 山村宏・向坂綱二・平野和男 1966:「出土須恵器の編年」『大沢・川尻古窯跡調査報告書』(3月)
- 横山浩一 1959:「手工業生産の発展」『世界考古学大系』3(11月)
- 山村 宏他 1965:『高田市水掛夜古墳群発掘調査報告書』(6月)
- 山村 宏 1965:「谷口原古墳群」『埋蔵文化財発掘調査報告書』(3月)
- 増井義己他 1968:『瀬戸古墳群』
- 小野山節 1959:「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系』3(11月)
- 久永春男 1966:「結語」『豊田大塚古墳発掘調査報告書』(7月)



A) 発見当時の工事現場 (矢印が天井開口部)



B) 墓道の調査



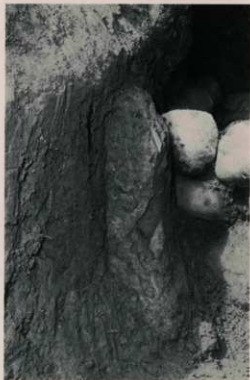
A) 墓道の究極



B) 羨道部から女室内をのぞむ



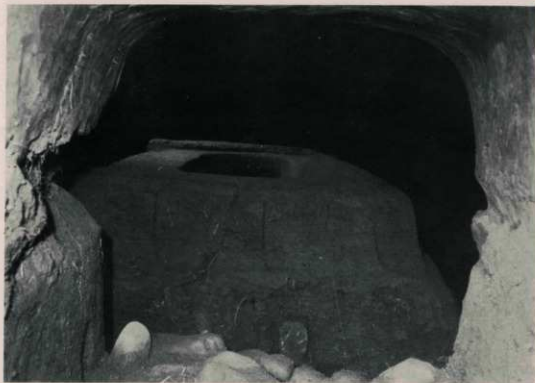
A) 羨道部正面 (低い位置から)



B) 羨道部入口の突出部 (向って左側)



C) 羨道部入口の突出部 (向って右側)



A) 石室内石棺全景



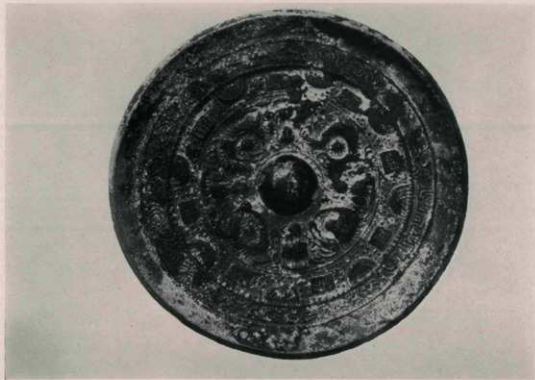
B) 石室内部



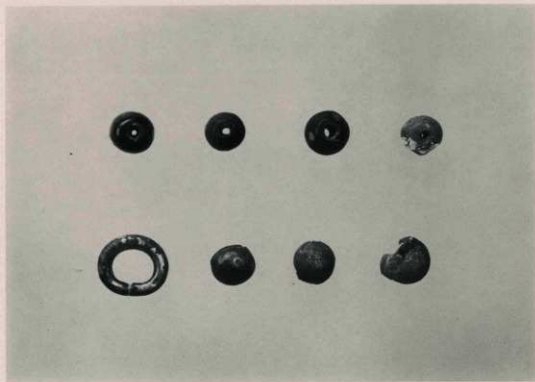
A) 玄室内入口付近の須恵器出土状態



B) 玄室内東南部における須恵器と土師器の出土状態



A) 変形神獸鏡



B) 耳環と玉類



A) 器台と無蓋高杯



B) 甕



A) 有蓋高杯(第1類)



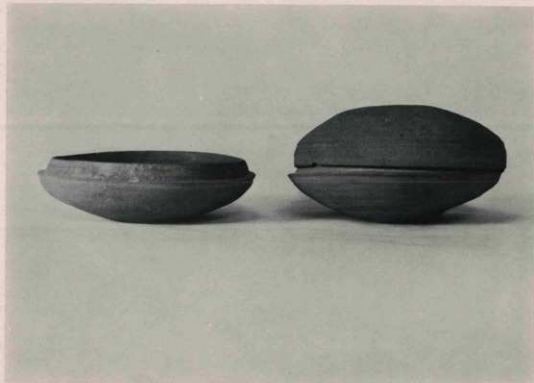
B) 有蓋高杯(第2類)



A) 脚付 埴 と 提 瓶



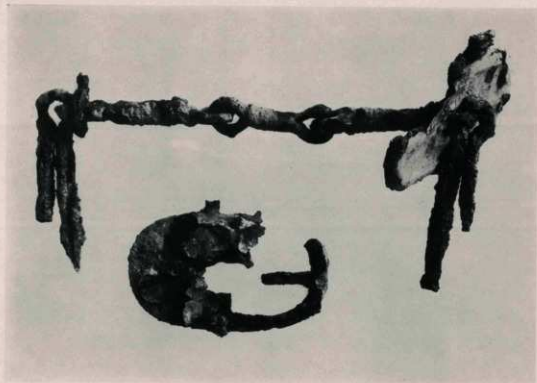
B) 台 付 埴 と 埴



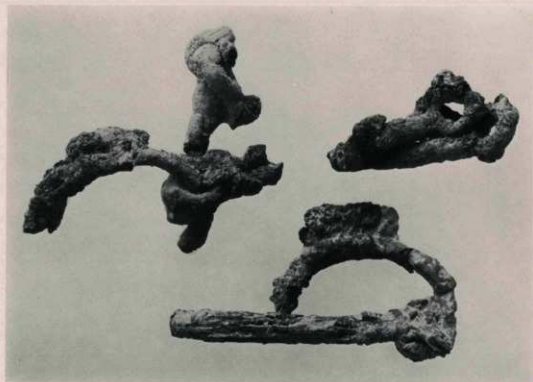
A) 蓋 杯



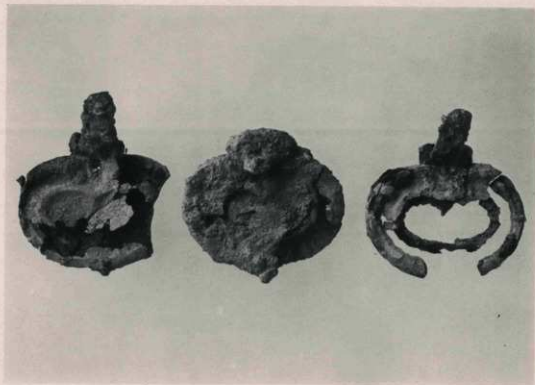
B) 土師器脚付埴・高杯および杯



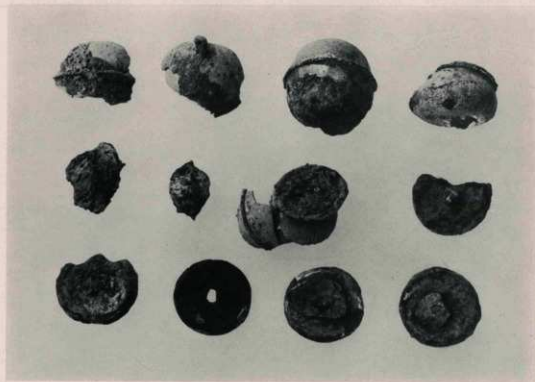
A) 鉄地金銅張鏡板付轡



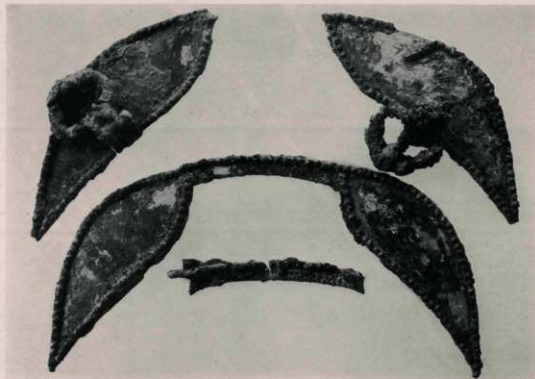
B) 素環式轡



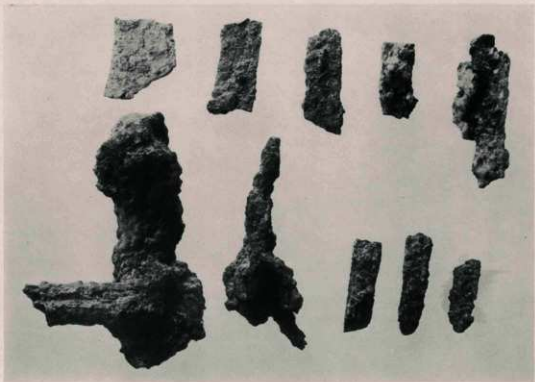
A) 鉄地金銅張杏葉



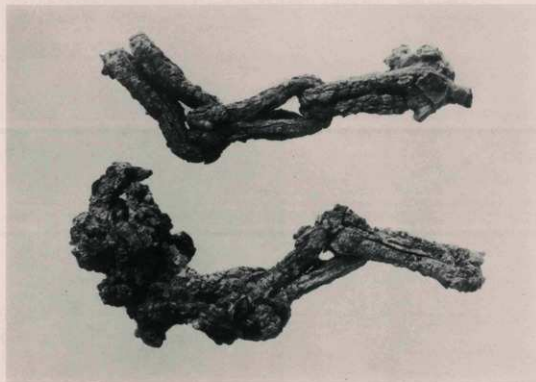
B) 金銅製鈴



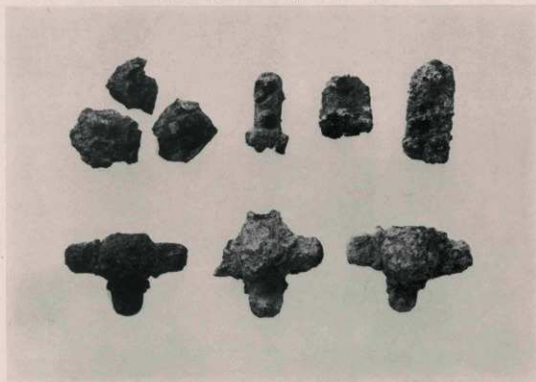
A) 鉄地金銅張鞍金具



B) 木心壺鍍と兵庫鎖



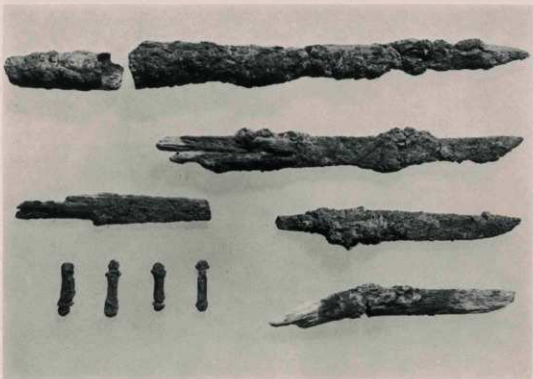
A) 兵 庫 鎖



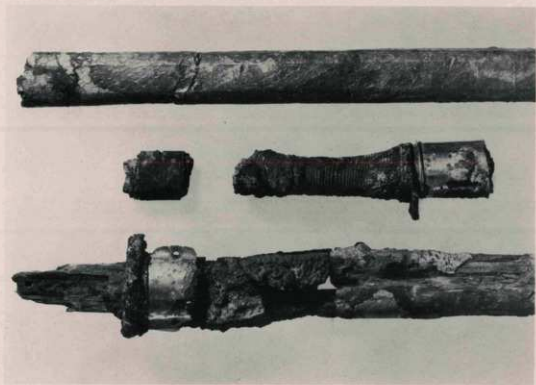
B) 鉄地金銅張辻金具



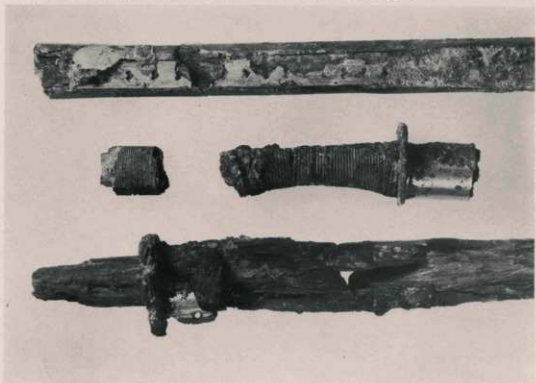
A) 金銅製単竜環式および銀製円頭式柄頭



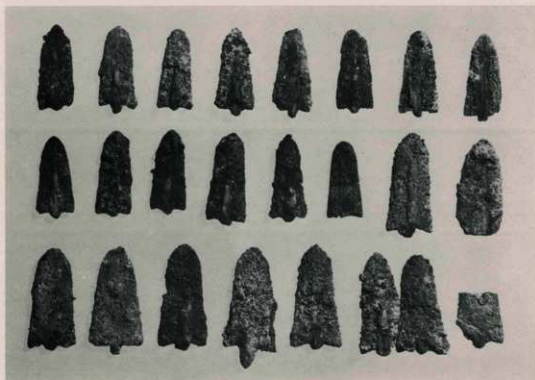
B) 鉞・刀子と不明鉄製品



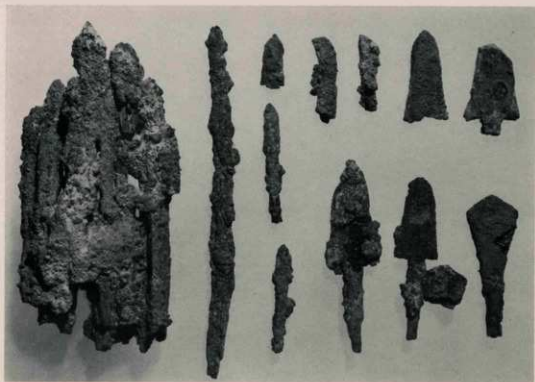
A) 飾 大 刀 類 (佩 表)



B) 飾 大 刀 類 (佩 裏)



A) 鉄 鏃 (短 茎 平 根 式)



B) 鉄 鏃 (有 茎 平 根 式 と 尖 根 式)

